

地球を笑顔にする
SDGs ACTION BOOK
2022-2023



サステナブルな社会を実現し、
地球を笑顔にするために。

2021年、TBSは「地球を笑顔にするSDGs ACTION BOOK」を刊行しました。それは、単にSDGsの取り組みをまとめたものではなく、思考の痕跡であり、若者たちとのパートナーシップの起点となりました。

SDGsは、貧困や不平等、地球温暖化、環境破壊など、世界が抱える社会課題を2030年までに解決することを目指すものです。その目標達成に貢献するためには、継続こそ唯一の解であると信じて、私たちは2022年も「地球を笑顔にするSDGs ACTION BOOK」を制作しました。

2020年から継続しているSDGsキャンペーン「地球を笑顔にするWEEK」では、放送やイベントなど、さまざまなコンテンツを通じて未来に向けたアクションを提案し、“社会を動かす起点”となることを目指します。また、メディアとしての取り組み以外にも、責任ある一企業として、脱炭素社会に向けた気候変動対策や、サステナブルな働き方などをさらに深化させます。

SDGsという言葉が社会に浸透したいま、次に求められるのは具体的なアクションです。そのためには、未来を担う若者たちと共に学び、考え、行動を起こしていくことが大切だと私たちは考えます。

地球を笑顔にするために、
みんなで新しい一歩を踏み出しませんか？

CONTENTS

- 03 THINK! SDGs
- 04 TALK SESSION1 SDGsについて考えよう。共に、深く。
佐々木卓×池田悠理×小山あや×高木優衣×松浦航平×玉置紗也×吉野菜花
- 08 TALK SESSION2 メディアの一員として、SDGsとどう向き合うか？
蓮見孝之×日比麻音子×宇賀神メグ
- 10 SDGs THINKING GUIDE!
- 14 TALK SESSION3 地球の未来について、一緒に考えよう。
杏×インガー・アンダーセン
- 16 RECOMMEND SDGs! 片山賢太郎／片山亮／中田真／楊伊歌
- 19 ACTION! SDGs
- 20 若者たちと一緒に、アクションを起こす。
- 23 ダイバーシティのフィールドワークへ
キニマンス塚本ニキ×櫻井晃太郎×國吉こなつ×上川そよ香×安藤蒼空
- 26 地球を笑顔にする WEEK
- 28 INTERVIEW 田嶋真洋／加納沙也香
- 30 世界を笑顔にする広場／もったいない広場
- 32 続けよう、SDGs。
- 35 WORKING! SDGs
- 36 TALK SESSION4 TBSで働くということ。
斎藤絵里子×苑田翔吾×ドウトレイシリアル×那須元紀×皆川玲奈
- 39 INTERVIEW 国山ハセン
- 40 VOICE OF PARTNERSHIP
- 18・34 SPECIAL CONTENTS TBSで働く、一人ひとりにできること

SDGs みんな

01 Chapter

みんなと一緒に、考えよう。

SDGsへのアプローチに正解はありません。だからこそ、学び、考え、対話し、手を取り合うことが大切です。地球を笑顔にするために、まずはみんなで一緒に考えましょう。若者たちの感覚が、SDGsを伝えるアナウンサーたちの想いが、エンタテインメントの力が交わる時、SDGsの”考えるヒント“が生まれます。

SDGsについて考えよう。

共に、深く。



地球を笑顔にするためにできることを、若者たちと一緒に考える。そんなテーマのもとに、昨年に引き続き、若者たちとTBSホールディングス代表取締役社長・佐々木卓との対話の時間を設けました。6人の若者たちとのクロスセッションから踏み出される、未来に向けた新しい一歩。皆さんと一緒に、SDGsについて、共に、深く考えてみましょう。

佐々木「TBSでは、ニュースでSDGsに関することを放送しています。ずっと前からやっています。当時の私たちの気持ちは、『ニュースでSDGsを伝えているから、世の中の役に立っているよね』。だけど、それをがらっと変えました。我々自身がSDGsに参加して、ニュースだけではなく、バラエティやドラマ、スポーツを担当している人もSDGsに関わっていきようよ。そこで、『地球を笑顔にするWEEK』(⇒P26、以下WEEK)に取り組み、これまでに4回やりました。これはちょっと自慢なんですけど、テレビ局の中ではいち早くSDGsに取り組み、定期的に続けています。さまざまな番組で自主的にSDGsを取り上げていることが特徴で、今年もイベントを開きました(世界を笑顔にする広

場⇒P30)。放送以外で直接人と触れ合うこともどんどんやっていきたいと思っています」

池田さん「私たちは会社(株式会社ISHIZUE)としてSDGsを掲げているわけではないのですが、高校生が教える小中学生向けのオンライン塾を通じ、新しい教育を広める活動をしています」

吉野さん「SDGs子ども勉強会プロジェクトは、中学生から大学生が約20名在籍し、SDGsの認知を向上させるための活動を行っています。いろんな目標に注目していますが、特にミートフリーの活動に重点を置いています」

畠中さん「麗澤中学・高等学校SDGs研究会は、もともと有志団体として活動していましたが、2020年に正式に部活動として発足し、今年度は70名ほどで活動しています。私たちの一番の特徴は、学校から部費をもらっていないことです。レモネードスタンド※から始まった活動なのですが、その収益を全額寄付するため、部の活動費はフェアトレードコーヒーの販売でまかっています」

松浦さん「その中で、私はフェアトレード紅茶やフェアトレードアイスの開発を担当しています」

玉置さん「私はどこの団体にも属していません

が、中学生のころからジェンダーに興味を持ち始め、ジェンダーやセクシュアリティに関することを調べたり、考えを深めたりしています」

小山さん「私が代表を務める学生団体は、主にSNS投稿やライブ配信を行っています。昨年は教員の方をお招きして、未来の教育について小中学生と話し合うオンラインイベントを開いたり、選挙を取り上げ、高校生が活動することによって大人の関心を引く活動を行ったりしました」

佐々木「政治に無関心であること自体がサステナブルではないですね。政治をやる人と一般の人たちの心が離れたらSDGsも何もなくて、バラバラに動いているだけなので、選挙に行きましょうという発想は素晴らしいと思いました」

小山さん「正直、SDGsって堅苦しいなって印象があって(笑)。SDGsに近づく一歩として、私は古着を着るようにするなど、アクションを楽しむことで、SDGsに興味がない人たちとの小さな架け橋になることを目指しています」

玉置さん「最近、TBSのドラマにSDGsの話題が出てきて、エンタテインメントの力でSDGsを伝えるっていいなと思いました。私はジェンダーやセクシュアリティに関する小説を書いているので、物語の力を使ってSDGsを伝えていけたらなと思っています」

佐々木「ぜひ読みたいですね。出版化される前にこっそり送ってもらえませんか?(笑) 自画自賛になってしまいますが、ドラマの中にキッチンカーでご飯を食べるシーンがあって、紙の箱と木製のスプーンが出てきて、『よくぞそうしてくれた!』って思いました。言葉で100回言われるよりも、タレントが木製スプーンで食べるだけで心に飛び込んでくる。ドラマの力、小説や音楽の力を使うことは、SDGsが体にしみ込んでいくことだと思います」

松浦さん「SDGsを人に広げることは難しいなと思います。私も最初、フェアトレードって聞いても全然わからなかったです。でも、ちゃんと学んで、誰かに説明したい。私の将来の夢は学校の先生なんですけど、生徒たちにもフェアトレードってこういうものなんだよと説明したい。身の回りで簡単にできるSDGsを広めていくことが大切だと思います」

畠中さん「WEEKではCMや見逃し配信でSDGsやその項目を観て、『あっ、SDGsに取り組んでい

る番組があるんだ!』ということを知りました」
池田さん「私もWEEKを観て、SDGsに興味のない弟と母とSDGsについて話しました。貴重な体験でしたし、そういう機会が複数の家庭であったらと思うと、すごく良い取り組みだと思いました」
佐々木「アンケート調査によると、WEEKを2回以上観てくださった方のうち、90%の方がSDGsについて行動した、もしくはしてみたいと答えました。大きなパフォーマンスをすることで、自然と心の中にそういう意識が芽生えるという結果が出たことはうれしいなあとと思っています」

小山さん「私は1年以上、家にテレビがない生活を送っているのですが、メディアでSDGsが発信されているのを見るとモチベーションが上がります。新しくやりたいこともどんどん出てきて、団体でのアクションにつなげられるんじゃないかって」

佐々木「テレビという出口だけではなく、もちろんラジオもあるし、(TVerやNEWS DIGといった)インターネットや活字メディアもあるので、より多くの人にコンテンツを届けるチャンスが増えました。テレビの特徴は、ある種の押しつけがましき。SDGsに興味なくても、どーんとテレビでやると知ってしまう。インターネットは自分の興味があるものを探す一方で、興味のないことを知るための場所ではない。テレビは知らなかったことと出会い、興味を広げていく能力では圧倒的なんですね。その訴求力はテレビが一番大きいと思っています」

池田さん「SNSが普及し、テレビを観なくなる人が増える中で、TBSはどのように時代に適応していくか、逆に変えない点があったら教えてください」

佐々木「まず変えないところからなんですけど、報道機関として、人の命や財産を守るためのお手伝いをする。これは使命なので絶対に変えません。それから、テレビが圧倒的に信頼されるメディアになるための努力を続けていく。そのほかのことはどんどん変えていこうと思っています。テレビを観る方が減ったとしても、携帯で観てもらおう、NEWS DIGで観てもらおうと。ちょっと乱暴な言い方ですけど、出口はなんでもいい。日本中、世界中、出口を選ばず自分たちのコンテンツを出していきましようって変わってきています。ただ、若者たちがテレビの前に座る時間が減っていることは事実なので、ぜひ、テレビに対する注文を教えてください」

池田さん「あるテレビ番組で自分たちの会社を取り上げてもらった際、すごく感動的なものとして放送していただきました。ありがたかった反面、その印象が強くなってしまい、私個人としてはモヤッとする部分があるなど。しっかりとリアリティを伝えたほうが若者は共感しやすいのではないのでしょうか」

佐々木「キーワードはリアリティですね」

吉野さん「テレビはインターネットと違って信頼性があるイメージが強いです。インターネットは情報の出どころがわからないことが多いので、テレビで

は情報がどこからきているのか、誰が言ったのかを伝えると観る側も安心できると思います」

佐々木「ニュースソースを明確にしたほうがもっともっと信頼されるということですね」

玉置さん「ジェンダーやセクシュアリティについて新しい価値観が出てきていますが、それによって逆に生きづらさを抱える人も増えているのではないかと感じています。ジェンダー平等の実現を押し切る感じで進めるのも良くないのではないかなと。同性婚や男性女性以外の性のあり方など、新しい価値観についてどう考えていますか？」

佐々木「僕が長く働いているテレビの世界にも、さまざまな性の自認を持っているスタッフやクリエイターがいます。実力本位の世界なので、例えば優れた演出家が自分の性の自認に関して発言することは珍しくはありません。ただ、“感覚的に慣れている”ことと、ちゃんと“勉強して考えて意識する”ことは違います。後者のほうがより高いレベルなので、勉強を続けなくちゃいけないと思っています」

吉野さん「TBSがほかの放送局よりも優れていると思う点がありますか？」



麗澤高等学校SDGs研究会
畠中優衣さん（高校2年生）
アクションの起こし方が
わからない人は多い

TBSホールディングス/TBSテレビ
代表取締役社長
佐々木卓
テレビの訴求力を最大限に使い、
SDGsを伝える役目を果たす

佐々木「うーん…優れているという答えと違うかもしれませんが、ちょっとユニークなことをやっているというお話をします。出口にこだわらずにコンテンツを作って、海外に売り出すやり方はTBSが先行しています。大きな劇場を作ったり、テレビ以外の体験型エンタテインメントのジャンルでも仕事をやっていきましょってというのは僕だけだと思います。それから、知育・教育ジャンルにも進出して、受験勉強以外の、心を豊かにする教育にアプローチします。子どもたちがいろんな発明をしたり、芸術作品に触れたりするためにスコップという会社を作りました。それから、熊川哲也さんのKバレエカンパニーと一緒にスクールを作って、全国に展開しようと計画しています。（子どもたちの）感性を豊かにしたい。道端にタンポポが一輪咲いていたら、きれいと言えるような子どもになってほしいと考えています」

畠中さん「ここ数年でSDGsを知る人が増えたと思うんですけど、アクションの起こし方がわからないという方もいると思います。どうやったらアクションを起こせると思いますか？」

佐々木「これは僕らも悩んでいます。特効薬みたいなものはないんですけど、まず誰でもできる簡単なことを大勢でやって、次のステップにいけたらなと思っています。『できることから始めましょう。その代わり長くね、みんなもね』と呼びかけている途中です。紙を減らして、エコバッグを使って、電力を自然エネルギーに換えて、意識を高めていきたいなと思っています」

松浦さん「地球を笑顔にするために、どんな行動をしていますか？」

佐々木「TBSはテレビの訴求力を持っているので、その武器を最大限に使い、SDGsをメディアで伝える役目を果た

麗澤高等学校SDGs研究会
松浦航平さん（高校2年生）
身の回りで簡単にできる
SDGsを広めていく



何かに対してひたむきに取り組む
学生を増やしていきたい

株式会社ISHIZUE取締役
池田悠里さん（大学1年生）



情報の出どころを伝えると
観る側も安心できる

SDGs子ども勉強会プロジェクト
吉野菜花さん（中学2年生）



学生団体代表
小山あやさん「仮名」（高校2年生）
SDGsに興味がない人たちの
小さな架け橋を目指す



していきます。それから、例えばエコであったり、そういう活動をしている人たちとパートナーシップを結んでいきたいです。エコを意識した仲間をどんどん増やしていきたい。さらには海外のパートナーとも組んで、SDGsを海外でもやっていくことが大きな目標です。最後に、TBSと一緒にやりたいことをぜひ提案してもらいたいです！」

玉置さん「みんなの日々の取り組みがこういうことにつながっていますという結果を、テレビという信憑性のある媒体で伝えてほしいです」

佐々木「頑張ります。ありがとうございます！」

池田さん「私は、何かに対してひたむきに取り組む学生を増やしていきたいと思っています。私のやっている学習塾のコンセプトとして、“学び方を学ぶ”ことをすごく大切にしています。学び方を学べる環境をどんどん作っていききたいので、TBSのメディアの力を活用して私たちの理念を広めていきたいです」

佐々木「なるほど、学び方を学んだ。面白いですね。また色々教えてください。今日はありがとうございます！」

神奈川県立多摩高等学校
玉置紗也さん（高校2年生）
物語の力を使って
SDGsを伝えたい



動画も公開中。
ぜひご覧ください。

メディアの一員として、 SDGsとどう向き合うか？



蓮見孝之

Profile

TBSテレビ/アナウンサー部
2004年入社。主な担当番組として、テレビ「JNNニュース」「ひるおび」、ラジオ「蓮見孝之まとめて！土曜日」など。2015年には保育士資格を取得し、TBS知育・教育プロジェクトにも参加している。



日比麻音子

Profile

TBSテレビ/アナウンサー部
2016年入社。主な担当番組として、テレビ「NST」。「オオカミ少年」ラジオ「アフター6ジャンクション」など。2022年の参議院選挙時は、JRN・TBSラジオ報道特別番組にて司会を務めた。



宇賀神メグ

Profile

TBSテレビ/アナウンサー部
2018年入社。主な担当番組として、テレビ「THE TIME,」「人生最高レストラン」、ラジオ「ハライチ岩井ダイナミックなターン」など。学生時代にフェアトレードコンシェルジュの資格を取得している。

TBSとしてSDGsの大きなビジョンを掲げる一方、メディアの最前線でニュースを伝え、SDGsについて発信することを職務とするアナウンサーたちは、日々、どのような考えを持ってSDGsと向き合っているのでしょうか？「地球を笑顔にするWEEK」をはじめ、2022年5月3～5日に赤坂サカス広場で行われたSDGsイベント「世界を笑顔にする広場」などに関わったアナウンサー3人が考える、SDGsを伝えることの意義、その中で得た気づきとは――。

蓮見「私は平和をテーマにした『世界を笑顔にする広場』で、子どもたちに紙芝居の読み聞かせを行いました。紙芝居は『報道特集』の記者である加古紗都子さんが、ウガンダ共和国での取材をもとに作ったもの。内戦時、ウガンダ共和国の10代の女性が銃を持たされて、兵士として生きていかなければならなかったという物語です。そういう現実と同じ年くらいの子供たちが見聞きすることで、衝撃を受けたでしょうし、戦争について想像するきっかけを提供できたことはすごく意味があったと思います」

日比「私は高校にお邪魔して、高校1年生に向けてSDGsの授業を行いました。SDGsに関するクイズを出題したのですが、私の中で教えたという感覚はありません。高校生たちと一緒に考えた時間でした。大人よりも高校生のほうが自然にSDGsを捉えていて、彼らに教えてもらう感覚のほうが強かったですね。伝えるのではなく、一緒に考える。そういう意識は常に抱いています」

宇賀神「昨年スタートした『THE TIME,』に、赤坂の街にホテルが息できる森を作ろうという企画がありました。SDGsでは、いまあるものを守ろう、大切に使うという考えになりがちですが、新しく何かを作り出していくことも大事なのだ学びました。また、『地球を笑顔にするWEEK』の大使として色々なことを調べていく中で、日本人の5人に1人の若者が経済的理由で生理の貧困に陥っていることを知り、衝撃を受けました。生理用品の無償配布を行っているレッドボックスジャパンというチャリティー団体もあり、なぜ知らなかったんだろう、もっと早く気づけなかったんだろうと思いました」

日比「私も大使を務める中で、自分がいかにSDGsについて知らなかったか、やっていたかにか気づかされました。一方で、知っている人ばかりにSDGsを伝えられても壁がある。上から目線や押しつけがましさがあると、視聴者がテレビから離れていってしまう要因になると思います。だから、『知らないです』『わかりません』と言える勇気を持ち、『一緒に考えましょう』と。そういう意識がないと、SDGsの目標は達成できないと思います」

宇賀神「最近、ヘアドネーション（小児がんや先天性の脱毛症などで頭髪を失った子どもに、寄付された髪の毛でウィッグを作り、無償提供する活動）のために髪の毛を伸ばしている小学生の男子のニュースを見ました。それを見て、髪の毛を伸ばすのは女の子というイメージを持っていた自分が、なんて凝り固まっていたんだろうと思いました。SDGsを通して教えられることは本当にたくさんありますね」

アナウンサーという職業柄、話題は「言葉を起点にしたSDGs」に広がっていきます。

蓮見「地元さいたま市の小中学校に行き、子どもたちに講演をする活動を10年近く続けているのですが、最近はジェンダー平等について話す機会が増えています。昔は何気なく使っていた言葉だけど、『男らしい』『女房役』ってどうなんだろう。『医師』とは別になんで『女医』という言葉があるんだろう。『стюワードレス』は『キャビンアテンダント』に変わったねと。そういった表現に子どもたちから触れることで、大人になったときに意識的に言葉を選んで使ってもらえたらいいですね」

日比「私は『女子アナ』撲滅キャンペーンとして、『女子アナ』という言葉を使っている人がいたら、『女性アナウンサーです』と訂正するようにしています。面倒臭いと思われるかもしれませんが、小さなことの積み重ねで偏見をなくしていきたいと思っています。『ママさんアスリート』という言葉も訂正しますし、プロフィールに『3人の子どもを育てている』と書かれていたら、『それっていますか？』と、考える機会を日常的に作っていかないといけない。メディアである我々がそういう偏見を提示して、それが常識になってしまうのが一番恐ろしいこと。メディアの影響力の大きさには誰よりも敏感でいたいと思っています」

メディアの一員として、アナウンサーとして、伝えることについても3人は思考をめぐらせます。

日比「ロシアによるウクライナ侵攻の第一報が入ったとき、自分が読んでいた原稿が嘘みたいでした。動揺しましたし、迷いも常にあります。でも、メディアとして冷静に、少しでも視聴者に寄り添った伝え方ができればと思っています」

宇賀神「『THE TIME,』は朝の番組なので、悲しい出来事も重く伝えすぎると朝の食卓の雰囲気壊れてしまうかもしれない。なので、できるだけフラットにお伝えして、楽しい話題は明るくお伝えするように意識しています」

蓮見「ロシアによるウクライナ侵攻にしても、『ウクライナが発信している情報は100%本当か？』と疑う視点は大事だと思います。TBSが発信する情報も含め、情報を疑い、考え、最終的には自分の目で確認してほしいですね。SDGsについて思うことは、日常に早く“溶かす”。それに尽きます。SDGsはここ数年の動きですが、『ものを大事にしよう』『格差を是正しよう』という動きはずっと前からありました。SDGsというキャッチーな言葉が生まれたから取り組むのではなく、仮にSDGsという言葉がなくなっても、どうやってその取り組みを日常に溶かしていくか。その作業を続けるべきだと思いますね」

目標達成に向けて
新しく作り出す大切さ

SDGsを日常に早く
“溶かす”

メディアの影響力の
大きさに敏感でいたい



SDGs THINKING GUIDE!

17の目標に関して、世界はいま、どのような状況に置かれているのか？
アナウンサーが取り組む身近なSDGsとあわせて、
今日から始められるSDGsについて考えてみましょう。



1 貧困をなくそう

極度の貧困を表す国際基準である1日1.90米ドル(約200円)未満で生活する子どもは、世界中で推定6人に1人、3億5,600万人存在します※。そうした中で、宇賀神メグアナが意識したSDGsは「貧困をなくそう」です。「写真のように、買い物の際はフェアトレード認証、ウーマンズハンド認証の商品を選ぶようにして

います。収益の一部が女性の自立支援や経済的環境の改善などに役立てられます。日常生活でも取り入れやすい取り組みですね」

※日本ユニセフ協会ホームページ「子ども6人に1人が極度の貧困で暮らす ユニセフと世界銀行による分析」



5 ジェンダー平等を実現しよう

世界経済フォーラム「ジェンダーギャップ指数2020」によると、日本のジェンダーギャップは153カ国中121位に位置し、女性の社会進出が遅れをとり、男女の雇用・収入格差は深刻を極めていきます。同時に、LGBTQといった性的マイノリティへの差別問題もグローバルで浮き彫りになっています。そうした中、山

本里菜アナは「ジェンダー平等を達成しよう」を身近なところから始めています。「私は家事を分担しています。掃除、料理、洗濯や、家事以外の“名前のない家事”も話し合って分担するようにしています。日々生活する中で、お互いにとっての負担をできるだけ最小限にできるように心がけています」



2 飢餓をゼロに

日本では、本来食べられるにも関わらず廃棄されている食品の量が年間約522万トンにのぼります※。一方で、世界にはその日食べるものがない状態の人も数多く存在します。野村彩也子アナは、「飢餓をゼロに」を達成するために、身近にできるフードロスに取り組んでいます。「フードロスを減らすために、毎日の食

事の中で少しずつ気をつけたいですね。お仕事で食レポをする際は、できるだけ用意していただいた食事を残さず食べるように意識しています」

※環境省「我が国の食品ロスの発生量の推計値(令和2年度)の公表について」



6 安全な水とトイレを世界中に

水道設備がない暮らしをしている人は、世界中で約20億人いるとされています※。日本は安全で衛生的に水を利用できる環境が整っていますが、齋藤慎太郎アナは「安全な水とトイレを世界中に」を日々の中で心がけています。「地球温暖化などの影響で、今後、世界中の水不足が予想されています。そこで、私は“節

水”を心がけています。こまめに蛇口の水を止めるなど、小さなことですが、自分のできることを継続しています」

※ユニセフ「Progress on household drinking water, sanitation and hygiene, 2000-2020: Five years into the SDGs」



3 すべての人に健康と福祉を

世界人口の約半数は、基礎的な医療サービスを受けられない状況にあり、世界では5歳になる前に亡くなる子どもが年間500万人以上存在します※。新型コロナウイルスの感染拡大も続く中で、佐々木舞音アナは「すべての人に健康と福祉を」を意識しています。「自分自身や身近な人の健康を気にかけて生活するようにし

ています。こまめなアルコール消毒や手洗いがいなど、小さな意識の積み重ねが医療問題や介護問題の改善につながると思います！」

※日本ユニセフ協会「2019年度版 子どもの死亡における地域別の傾向」



7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

再生可能エネルギーの利用が進む中、依然として、日本のエネルギー供給量の84%を化石燃料が占めています※。日比麻音子アナは「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」を、暮らしの中で実践しています。「通勤の際は2駅分だけ、帰宅の際は頑張って家の近くまで！と、趣味の散歩を積極的に取り入れています。普

段と違う道を歩いてみるといろいろな発見があって飽きない！ 運動不足解消にもつながって、とっても気持ちがいいのです」

※経済産業省資源エネルギー庁「2021日本が抱えているエネルギー問題」



4 質の高い教育をみんなに

世界では、17歳までの子どもの5人に1人が学校に通うことができません※。強制労働を強いられ、紛争地域で兵士となる子どもたちの存在は、ロシアによるウクライナ侵攻が続くいま、より深刻さを増しています。そんな中、良原安美アナは「質の高い教育をみんなに」を意識しています。「本を読むことで、いま必

要な知識や考え方を取り込むようにしています。手に持っている本は、第二次世界大戦が舞台になっています。世界が揺れるいま、戦争や平和について、本を通して考え、学んでいます」

※ユニセフの主な活動分野：教育

8 働きがいも経済成長も

正社員と非正規社員の給与格差、過労死、児童労働など、労働をめぐる社会問題や企業ごとの課題は山積みです。働きがいがあり、十分な収入が守られ、社会的保護のある人間らしい仕事を指す「ディーセント・ワーク」の実現を目指し、高柳光希アナは「働きがいも経済成長も」に取り組んでいます。「私は仕事と休

日の切り替えを大事にしています。日本企業において、入社3年目までの離職率は3割を超えているといわれています。休みの日は仕事を忘れ、羽を伸ばす。自分に負荷をかけすぎずに仕事を続けることが大切だと思っています。仕事を忘れて走る。これが私にとってのSDGsです！」





9 産業と技術革新の基盤をつくろう

経済成長を後押しする技術革新に欠かせないインフラ整備。水道、ガス、電気、鉄道、インターネットなどが発展し、開発途上国にも行き渡ることで、新たな雇用創出やエネルギー効率改善につながります。宇内梨沙アナは「産業と技術革新の基盤をつくろう」への期待をこう語ります。「子どものころにガラケーが誕生

し、いまは5Gという時代まできました。安定したネット環境のおかげで、オンラインゲームもスマートフォンで簡単に楽しむことができるようになりました。ますます便利になる中で、これからインターネットがどのように進化していくのか、時代の移り変わりを体験するのがとても楽しみです！」



10 人や国の不平等をなくそう

日本では7人に1人の子どもが相対的貧困（その国の生活水準と比べて困窮した状態）に陥っているように、不平等は私たちの身近なところに存在します※。篠原梨菜アナは「人や国の不平等をなくそう」に取り組む中で、学びの姿勢を大切にしています。「フェアトレードの商品を手取る、社会の声を集める。さらにアク

ションの幅や深さを増すためには学ぶことが必要だと考え、本を読んでいます。書店や図書館によっては、SDGsの目標別に関連図書をもとめているところもあるんですよ」

※厚生労働省「2019年 国民生活基礎調査の概況」



11 住み続けられるまちづくりを

過去40年にわたって、人々が避難や移住をしなければならなくなるような自然災害が世界中で発生しています※。私たちが暮らす街を持続可能なものにするために、バリアフリー化や災害対策が必要です。田村真子アナは「住み続けられるまちづくりを」を広い視点で捉えています。「目標達成には地球環境を維持

することも大切です。ゴミの分別、家電を使う際はエコモード、そして気候変動について学ぶことも地球を大切にすることにつながります」

※ユニセフ「Unless we act now: The impact of climate change on children, UNICEF, 2015」



12 つくる責任 つかう責任

大量消費社会がグローバルで浸透したいま、生産時に生じる環境負荷や廃棄商品などが問題視されています。つくる側の気候変動対策やリサイクル素材の活用、つかう側のエシカル（倫理的な）消費や3R（リデュース・リユース・リサイクル）への取り組みなど、双方で目標達成を推進する必要があります。小沢光葵ア

ナは、ゴミの分別によって「つくる責任 つかう責任」を実践しています。「責任をもってモノやサービスを消費しています。例えば、紙リサイクルの表示があるものはすべて資源ごみとしてまとめています。時間のかかる作業ですが、細部までゴミの分別を徹底しています！」



13 気候変動に具体的な対策を

SDGsが国連に採択されて以来、世界各国の政府や企業が気候変動対策を加速させています。大気中の二酸化炭素濃度が産業革命前の水準の146%に高まるなど※、地球レベルの危機が訪れているためです。いますぐにできることはたくさんあります。節電を心がける、エコバッグやマイカップを持ち歩く、徒歩や自転車で

移動する。安住紳一郎アナは、TBSで排出されるゴミに着目しています。「私が意識したSDGsゴールは『気候変動に具体的な対策を』です。ゴミの削減に目を光らせています」

※国際連合広報センター「SDGs報告2020」

14 海の豊かさを守ろう

ペットボトルやビニール袋などのプラスチックゴミが、年間900～1400万トンも海に流れ出ていることをご存じですか？ それによって海が汚染され、生態系に悪影響を及ぼし、海の豊かさが失われています。その対策の一環として、喜入友浩アナは「海の豊かさを守ろう」に取り組んでいます。「ペットボトルの消費を減らすた

め、マイボトルを持ち歩いています。お気に入りのボトルに出会えたことがきっかけでした。『エコもおしゃれに！』。柄にもなく、そんなことを思うようになりました」

※国連環境計画（UNEP）「Our planet is choking on plastic」



15 陸の豊かさも守ろう

海と同様、陸の豊かさを守ることも大切です。森林はきれいな空気と水を生み出し、気候変動を食い止める役割を果たします。一方、森林火災や砂漠化が進み、3万種以上の生物が絶滅の危機に瀕しているといわれています※。「陸の豊かさも守ろう」に取り組む山形純菜アナは、そんな生態系に着目しています。「地球上の

動物や植物の生態系を守るために、なるべくゴミを出さないように心がけています。会社ではマイカトラリーやマイボトルを使い、買い物の際にはマイバッグを持参するようにしています」

※国際自然保護連合「Red List」



16 平和と公正をすべての人に

ロシアによるウクライナ侵攻によって、SDGsの目標の大前提である平和が脅かされています。紛争、テロ、人身売買、暴力、児童虐待、人種差別、汚職、贈賄…。いまこそ平和と公正について活発に議論し、地球を笑顔にするために何ができるかを考えるときが訪れています。井上貴博アナは「平和と公正をすべての

人に」について、当たり前を疑うことを心がけています。「例えば性別について。私の時代は当たり前のようには言われていた、『男らしさ』『女らしさ』という考え方をなくす。髻つりに接するときも、性別についての決めつけや枠にはめることをしないよう意識しています」



17 パートナリシップで目標を達成しよう

パートナーシップは、すべての目標達成の根幹をなすものです。なぜなら、1人では、1つの企業では、1つの国では、17ある目標を達成できないからです。年齢や性別、人種、国籍という枠組みを超えて、1人1人が手を取り合い、行動することでしかSDGsを達成することはできません。近藤夏子アナは、「パートナ

リシップで目標を達成しよう」を意識しつつ、日々の中でSDGsに取り組んでいます。「私はファッションが好きなのですが、新しいものを買うのではなく、母が昔着ていた服を自分好みに直し、新しい着こなしを楽しんでいます。地球にもお財布にも優しいファッションを楽しんでいます！」



SDGsをアクションにつなげるヒントはこちら！

YouTube
地球を笑顔にするチャンネル



「地球を笑顔にするWEEK」の見逃し配信や「地球を笑顔にするFESTIVAL」のアーカイブ動画などをご覧ください。

「TBS NEWS DIG」
SDGs特集 1.5℃の約束



ニュースサイト「TBS NEWS DIG」において、SDGsに関するさまざまな取り組みを深掘りして紹介しています。

地球の未来について、一緒に考えよう。

地球環境の危機をテーマにした日曜劇場「日本沈没 - 希望のひと -」(2021年10月~12月放送)の放送に合わせ、2021年10月に実現した杏さんと国連環境計画 (UNEP) のトップ、インガー・アンダーセン事務局長の特別対談を再録。

環境問題における意見交換をもとに、地球がいま置かれている状況に、地球の未来に思考を巡らせましょう。

杏 「このドラマは、環境問題が深刻化しているいまだからこそ、特に意義深いものになると思っています。また、3人の子どもの持つ母親として、環境問題が私たちの生活にどのように影響するかについて、常に強い関心を持っています。最近では、IPCC (気候変動に関する政府間パネル) が『地球温暖化は人間が引き起こした危機である』という強い警告を発していますが、地球温暖化の問題を解決するための最大のハードルはなんだと思いますか？」

アンダーセン 「IPCCの報告書は、何百人もの世界トップクラスの科学者によるもので、彼らは現在の気候などに基づいて『まづいことになっている』と人類に投げかけました。問題なのは、優秀な科学者たちは30年も前からこのことを言っていたにもかかわらず、世界の人々がちゃんと耳を傾けてこなかったということです。私たちは行動を起こさなかった。CO₂ 排出量を削減したり、経済活動を変えるなど、やるべきことをやらなかったのです」

杏 「日本政府は2030年までに温室効果ガスを46%削減することを目指していますが、達成することは可能だと思いますか？」

アンダーセン 「間違いなく可能だと思いますが、大変な努力が必要です。私たちは、2050年までにネットゼロにするという日本のコミットメントと、日本が示した全体的な削減に敬意を表します。必要なのは、再生可能エネルギーなどのCO₂ を排出しない選択肢へのギアシフトだと思います。日本は国民一人あたりのCO₂ 排出量が世界で3番目に多い国であることを受け入れなければなりません。つまり、まだまだ道のりは長いのです」

杏 「私はドラマの中でジャーナリストを演じています。環境問題において、メディアにどのような役割を期待しますか？」

アンダーセン 「メディアはとても重要です。なぜ重要かという点、メディアは事実、情報、データについて社会を映す鏡となるからです。また、企業が法律に従わない場合など、メディア

がその問題について世界に広く発信することで、政治家を含むすべての人に責任を取らせることができます」

杏 「UNEPのリーダーとして、目標達成のためにどのようなリーダーシップを発揮していきたいですか？」

アンダーセン 「複雑な科学の話をしてあまり伝わりません。私は科学の話、人々の日常生活に関係あるものに置き換えて説明するようにしています。自分の子どもが喘息で苦しむのを良しとする人は誰もいません。なぜ、子どもたちが苦しむのかというと、私たちの90%以上が汚れた空気を吸っているからなのです。事実を伝えるだけでなく、それが人間にどんな影響を与えるかを伝えることが重要です。ですから、何度も同じことを言う、それが私の果たすべき役割だと思っています。それだけでなく、連携や意識を高め、変革のためのムーブメントを起こさなければなりません」

杏

2001年よりモデルとして活動を始め、ファッション・コレクションで活躍。2007年に俳優デビューし、ドラマ「連続テレビ小説 ちかごうさん」「花咲舞が黙ってない」「日本沈没 - 希望のひと -」、映画「オケ老人!」「とんび」などに出演。2022年の「地球を笑顔にするWEEK」ではキャンペーン大使を務めている。



杏 「私は俳優として、エンタテインメントがSDGsにポジティブな影響を与えることができると常々思っています。“エンタテインメントの力”について、どのようにお考えですか？」

アンダーセン 「エンタテインメントは非常に強力なツールだと思います。芸術はすべて素晴らしい力を持っていると思います。私たちUNEPは、データ、数字、割合、成果、結果などを使って事実を伝えますが、それらを感情を込めて伝えることができるのは、あなたやあなたの業界のような人たちです。それが人々の心に届くのです」

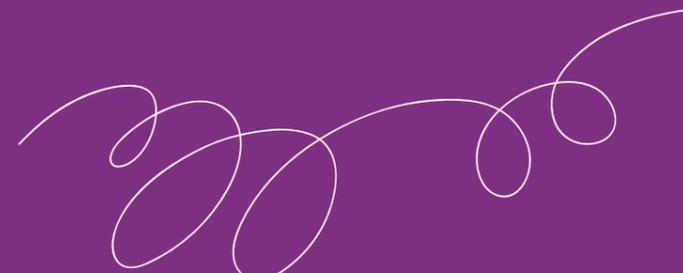
杏 「このドラマには“希望のひと”というサブタイトルがついています。事務局長にとって、未来を託せる“希望のひと”は誰ですか？」

アンダーセン 「さまざまな問題に直面しながら、自分自身で解決している若者たち。自ら気づきを得て、社会に出て発言する人。未来は自分たちのものであり、私やあなた、そして先人が享受してきたような未来を手に入れる権利があることを理解し、物事を変えなければならないと考える人。平等と公平を信じる男の子や女の子です。あなたが言う希望の人とは、未来の人であり、それは、あなたの3人の子どもたちです。私たちは彼らのために道を切り拓いていかなければなりません」

杏 「より良い未来を作るために、私たちが変えていかなくてはなりませんね。このドラマが、日本の環境問題への関心を高めるきっかけになることを期待しています。最後に、視聴者の皆さんにメッセージをお願いします」

アンダーセン 「未来はあなたの手の中にあります。あなたがすること、しないことが、未来に影響を与えるのです。ドラマでインスピレーションを得てください。そして、自分自身で何か行動を起こしてください。私たちの生き方、消費や生産の方法について行動を起こし、子どもたちに現実の危機について教えていきましょう。結果は悪いとは限りません。私たちは変化を起こすことができると、希望を持ち続けなければなりません」

杏 「今日はありがとうございました。お話しできて楽しかったです」



TALK SESSION: 03 Anne

Inger Andersen



TBS公式YouTubeにて対談の動画を公開中。
ぜひご覧ください。

インガー・アンダーセン

国連や世界銀行などで30年以上にわたって環境問題、開発問題などに取り組み、国際自然保護連合 (IUCN) の事務局長を経て、2019年より国連環境計画 (UNEP) 事務局長に就任。環境問題のエキスパートとしてSDGsの目標達成を推し進めている。



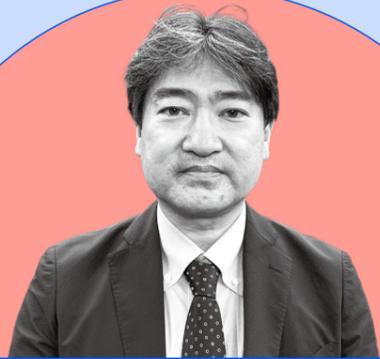
RECOMMEND SDGs!

SDGsの達成期限である「2030年」に向けて、どう思考をリセットし、どう暮らしを変えていけばよいかをテーマにしたBS-TBSの対談番組「Style2030 賢者が映す未来」。さまざまな分野の第一人者と共にSDGsについて考え続ける番組制作者の皆さんに、SDGsに関するヒト・モノ・コトの“いいね!”を伺いました。



Style2030 賢者が映す未来

ホストの龍崎孝（ジャーナリスト）がさまざまな分野の第一人者をゲストに迎え、SDGsをフックに2030年の社会や暮らしを考える対談番組（TBSスパークル制作）。2022年4月、CO₂排出などの環境負荷に配慮した番組制作を評価する「アルバート認証」（イギリスの団体が運営）を、日本の民放番組として初めて取得した。



プロデューサー (BS-TBS 報道情報局情報番組部)

片山賢太郎

● 注目している人物・団体は？

認知症向けのデイホームと保育園を併設する「また明日」を運営するNPO法人「地域の寄り合い所 また明日」です。認知症のお年寄りが子どもに本の読み聞かせをする様子が自然で、管理する側の都合ではなく、入所者にとって何が良いかを追求しています。介護や子育ての不安を地域で乗り越えようとする活動に感銘を受けます。

● SDGsをめぐる現状をどのように捉えていますか？

ゲストの宇宙飛行士・野口聡一さんは、「気候変動に無関心でいることは悪である」と言い切りました。環境を優先するのか？ 経済成長を優先するのか？ 長年議論されてきたテーマですが、SDGsをきっかけに、双方同時に成立すべきもの、という前提が（程度の差はあれ）できたと思います。欧米諸国では、ESGを格付け基準とし、機関投資家の投資の行方を左右する時代が長く続いています。ロシアによるウクライナ侵攻をきっかけに化石燃料をめぐる“揺り戻し”は多少あるとしても、この流れは大きくは変わらないでしょう。SDGsは成長を目指すためにも必要な視点であり、一過性のものとならないよう、2030年の時点で各項目の到達度まで伝えることがメディアの責務であると考えます。

● 未来を担う若者たちへのメッセージは？

「当たり前のことを皆で丁寧にやってみたら◎。当たり前ののにうれしい、それがSDGs。」番組司会者の龍崎孝氏の言葉です。サステナブルな暮らしとは、丁寧な暮らし。その生き方のヒントを見つけて、身近な人と分かち合うことが大切だと思います。



プロデューサー (TBS スパークル エンタテインメント本部)

片山亮

● 注目している人物・団体は？

感銘を受けたのは、徳島県の上勝町に暮らす人々です。2003年に日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言」を打ち出し、ゴミゼロを目指した「45種類のゴミ分別」を行っています。分別を細分化することで再資源化できるものを増やし、町のリサイクル率は東京都の4倍となる80%超を記録しています。別番組で取材した際、すべての町民が“45分別は当たり前”のこととして生活している様子が印象的でした。少しの苦勞を“当たり前”にすることが、SDGs達成の近道なのではないかと思いました。

● SDGsを発信することの意義、または難しさとは？

ゲストの経済思想家の齋藤幸平さんは、「SDGsは大衆の阿片」という強い言葉で、SDGsを一種のファッションのように扱い、満足している先進国の現状を非難しました。それ以降、「僕たちの番組もファッションの一部になっていないか？」と考え、アルバート認証取得という行動を起こしました。何か新しい行動を起こすときは「勇気」が必要です。僕たちメディアの役割は、視聴者がSDGsの行動を起こせるよう、「勇気」を届けることだと思っています。

● 今後、発信したいSDGsのテーマは？

「パートナーシップで目標を達成しよう」です。SDGsの各目標を見ると、どれも一個人や一企業、一国のレベルで達成できるものではありません。現在は各国のSDGs進捗状況と日本を比べ、まるで「競争」のように考えてしまいがちですが、17の理念に基づく「共創」社会の実現に向けた取り組みに目を向けていきたいです。



総合演出 (TBS スパークル エンタテインメント本部)

中田真

● 印象に残っている番組ゲストは？

宇宙飛行士の野口聡一さんです。「宇宙は死の世界」という言葉が印象的で、生き物の存在を許さない宇宙に対して、地球は青く輝く生命に満ちあふれた「水の惑星」であると語られました。これまで当たり前すぎて意識していなかった、地球上で息をして生きられることの有り難さ、この地球環境を守り続けるには、全地球的な取り組みが必要であることの重要性に改めて気づかされました。

● 注目している人物・団体は？

現代美術家のSputniko! (スプツニ子) さんです。テクノロジーを駆使したユニークな映像作品で、「女性の新しい生きやすいカタチ」を描き出し、発信することで、現代女性が抱える苦しさを少しでもやわらげることを目標にされています。男性でも女性でも何かを諦めることなく、自分の働き方や生き方を広げていけるような社会をサポートし、日本で理解が遅れている「構造的差別」に向き合う彼女の活動に関心を持っています。

● SDGsをめぐる現状をどのように捉えていますか？

2015年の国連サミットで採択されたSDGsですが、目標達成年として掲げている2030年まで、今年がちょうど折り返し地点になります。いまだに収束が見えない新型コロナウイルスの猛威や、世界的な政情不安がSDGs達成の逆風となっていますが、一方で、コロナ禍のニューノーマルな暮らしへの対応が、気づかないうちにSDGsにつながる行動へと変化したと思います。そんないまだからこそ、より一層、SDGsへ取り組む姿勢が問われていると思います。



ディレクター (TBS スパークル エンタテインメント本部)

楊伊歌

● 印象に残っている番組ゲストは？

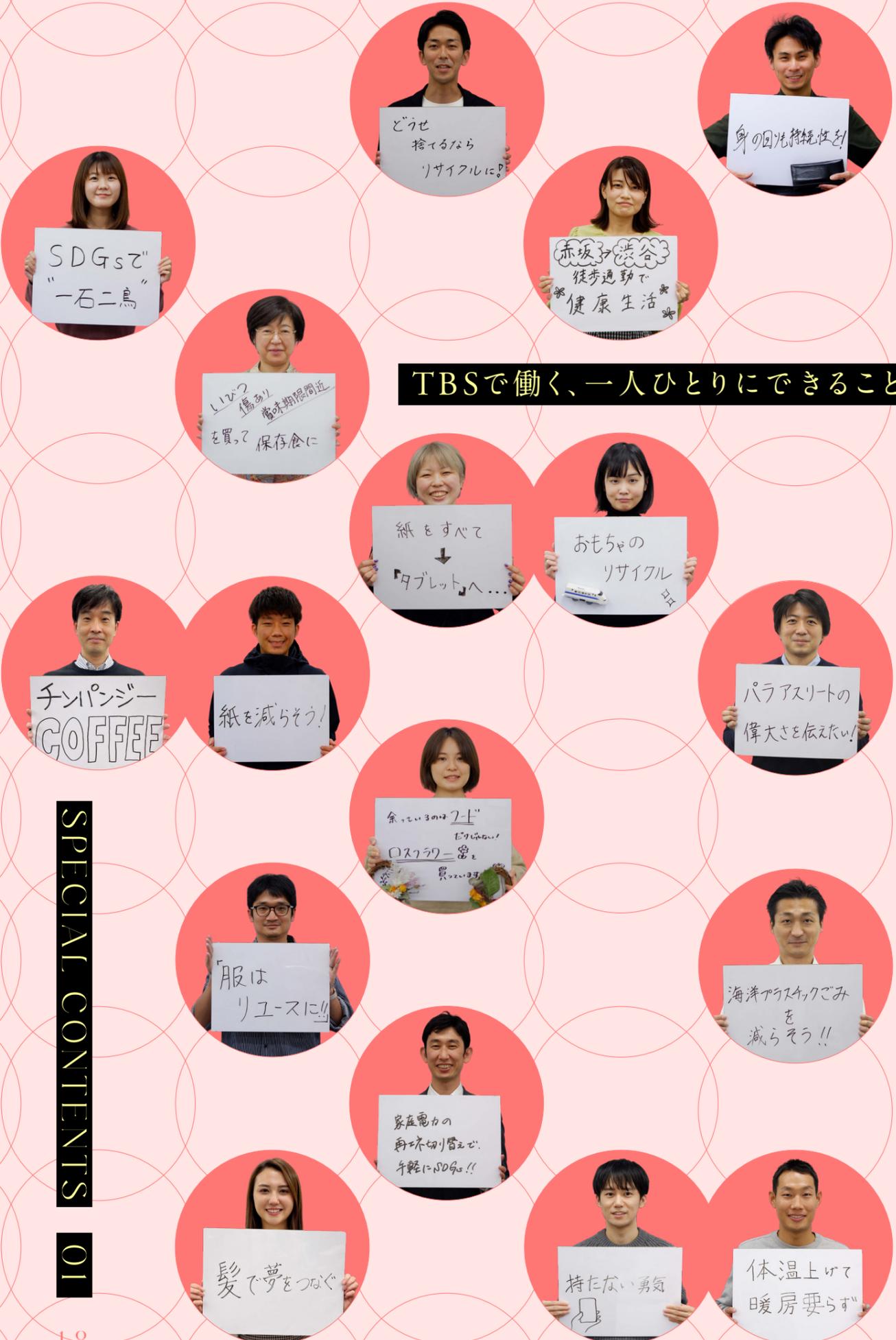
サヘル・ローズさんです。彼女は7歳まで孤児院で過ごし、養母と一緒に来日してしばらく路上生活を送り、中学時代に差別を受けました。貧困や不平等を経験してきた彼女だからこそ語れる話に、出演者やスタッフも感動し、涙がポロポロとこぼれる収録現場でした。私は外国人として、彼女と同じく、差別を受ける悲しい経験をしました。差別や偏見をなくすために、サヘルさんは「相手を知る」ことが必要だと言いました。確かに、少し相手を知ることができれば、考え方も大きく変わると思います。彼女が話したことは、いままで自分の言葉で表現できなかった気持ちでした。

● SDGsをめぐる現状をどのように捉えていますか？

SDGsが資本に狙われていることが問題だと思います。FSCなどのマークをつければ商品が売やすくなる、SDGsに取り組めば世間から評価される…。SDGsはお金儲けの手段でも、自己満足の近道でもありません。いまこの地球に生きている人、そして次の世代が、楽しく長く生きていくために向かうべき目標です。目標に向かう前に、その理由や方向性を再確認することが課題だと思います。

● 未来を担う若者たちへのメッセージは？

周りの人の個性を尊重してください。私たちは人と同じでもいい、人と違っていい。当たり前の考え方を捨てて、一度目の前の人を見て、考えて、話して、行動してください。そして、他人の優しさを理解してください。常に感謝の気持ちで人と接することができたら、持続可能な毎日と、お互いを理解し合える社会につながっていくと思います。



TBSで働く、一人ひとりにできること

SPECIAL CONTENTS 01

STARTLINE

02 Chapter

さあ、一緒に行動を起こそう。

学び、考え、対話し、手を取り合ったら、そう、行動を起こすときです。
 TBSが若者たちと起こしたアクションや、「地球を笑顔にする WEEK」などの取り組みをご紹介します。
 アクションを共有し、継続し、深め、促すことで、若者たちへ託す未来へのバトンが生まれます。

若者たちと一緒に、 アクションを起こす。

SDGsに取り組んだ当初から、TBSは若者たちと一緒にアクションを起こすことを念頭に置いていました。理由はシンプルです。地球を笑顔にするためには、未来の地球を担う若者たちの意見や行動力が不可欠だから。そして、パートナーシップなくしてSDGsの目標は達成できないからです。

そんな思いから、TBSは学生団体を中心とした若者たちとSDGsコミュニティ「地球を笑顔にするACTION」を結成し、2022年の春から活動をスタートしました。定期的にミーティングを行い、TBSと一緒に何ができるか、何をしたいかについ

て対話を重ねる中で、アクションプランが形になっています。

2022年4月には、SDGs子ども勉強会プロジェクトと共に、彼らがプロデュースしたミートフリーメニューをTBSのカフェテリアに導入。ミートフリーキャンペーンを実施しました(⇒P21)。さらに、若者たちから集まったアクションプランの中から、2022年8月にはラジオ番組「アシタノカレッジ」とコラボしたフィールドワークが実現(⇒P23)。まだまだ小さな一歩を踏み出したばかりですが、若者たちとのパートナーシップにご期待ください。

コミュニティ
「地球を笑顔にするACTION」
に参加している若者たち



SDGs子ども勉強会プロジェクト

小学生から大学生まで幅広く在籍し、自治体へのミートフリー導入の働きかけなどを中心に活動。昨年のACTION BOOKでは、佐々木社長と対談を行いました。



学生団体 50cm.

都内の高校生が中心となって結成し、主に同世代に向けたSNS投稿やライブ配信を実施。「半径50cmから行動を起こす」ことを理念に掲げ、さまざまな活動を行っています。



麗澤中学・高等学校SDGs研究会

麗澤中学・高等学校の部活動としてスタートし、レモネードスタンドを通じた寄附活動や、さまざまなフェアトレード商品の販売を行っています。



学生団体AFF (Action For Future)

名古屋を中心に活動する学生グループ。SDGsの周知活動として学生向けのオンライン講座を開催するほか、名古屋市SDGs推進プラットフォームの会員を務めています。



寺子屋 ISHIZUE

教育に疑問を持った3人の高校生が創業。「家と学校ではない第3の学び舎」をコンセプトに、小中学生を教えるオンライン塾を運営。講師は全国の現役高校生が務めています。



若者たちが考えた ミートフリーメニューを TBSカフェテリアで提供

SDGs子ども勉強会プロジェクトは、畜産業などで生じる環境負荷を減らすために、肉の消費を減らすミートフリーを実践し、広める活動を行っています。2022年3月には、TBSの社員・スタッフが参加する学びの場「TBSグループユニバーシティ」に彼らを招き、「子どもたちから学ぶ『食の危機』」をテーマに講演を行っていただきました。その中で、彼らから「私たちがプロデュースしたミートフリーメニューをTBSの社員食堂に導入してほしい!」という提案があり、アクションプランを実行に移すためのプロジェクトが始まりました。

実現にあたっては、カフェテリアを運営するイトランド株式会社をはじめ、TBSの厚生部、SDGs企画部がSDGs子ども勉強会プロジェクトとタッグを組み、ミートフリーメニューを考案。大豆ミートを使ったメンチカツやスパイシーキーマカレー、あんかけ焼きそばといったメニューが生まれ、4月25～28日の4日間にわたってカフェテリアで提供。多くのTBS社員やスタッフがミートフリーに触れ、地球にやさしい料理に舌鼓を打ちました。



VOICE OF PARTNERSHIP

継続を意識して、
今後も若者たちと一緒に地球にやさしいメニューを考案したい

SDGs子ども勉強会プロジェクトの若者たちとの打ち合わせでは、彼らの熱い思いをしっかりと受け取り、メニューに反映していきました。ミートフリーに関する勉強会も行い、若者たちの提案や食品ロス削減の食材を踏まえ、TBSカフェテリア用のメニューを考案しました。これまでも大豆ミートを使用した料理は提供していましたが、若者たちとの勉強会後は食数が伸び、ミートフリーへの抵抗感がなくなったように感じています。若者たちがきっかけを作ってくれたおかげです。

メニューを作成する際、1人ではマンネリ化してしまうこともありますが、今回は皆さんか

らたくさんの意見をいただき、今までにないアイデアが浮かんできました。新しいご縁も生まれ、より良いメニューを作っていくために、この関係性を大切にしていきたいと思います。やはり、継続していくことを一番意識すべきだと感じました。

今回のコラボ企画で生まれた若者たちとのつながりを継続し、今後も意見交換会やメニュー考案と一緒に進めていきたいと考えています。また、地球にやさしいメニューを提供する際は、動機づけとなる“食する意義”も併せて告知し、メニューを手に取りやすい環境づくりを実践していきたいと思っています。

イトランド株式会社
小林由佳



ACTION 2

若者たちと一緒に、 未来のアクションプランを考える

コミュニティでやってみたいことを募ったところ、
たくさんのアイデアが集まりました。

若年層で気軽にSDGsについて話し合える、学び合える場所など、サステナブルな生活を促せるような企画
佐藤晴奈

私たちが行っているすべての企画を屋台のようにして、体験型ブースなどを作って展示会をしてみたい
小山陽香

コミュニティで関わった団体とコラボして、SDGsに関するアクションを起こしたい
畠中優衣

学生が企業や政治家、行政を訪問し、取材した内容をまとめて放送したい
油口珠磨

SDGsに懐疑的な人との意見交換などを活用した、SDGsの課題について知るサイトを作りたい
高崎優太

フェアトレードカフェを作りたい。メニューや食器、内装などをSDGsに関連したものにする
土屋真希・本田陽菜

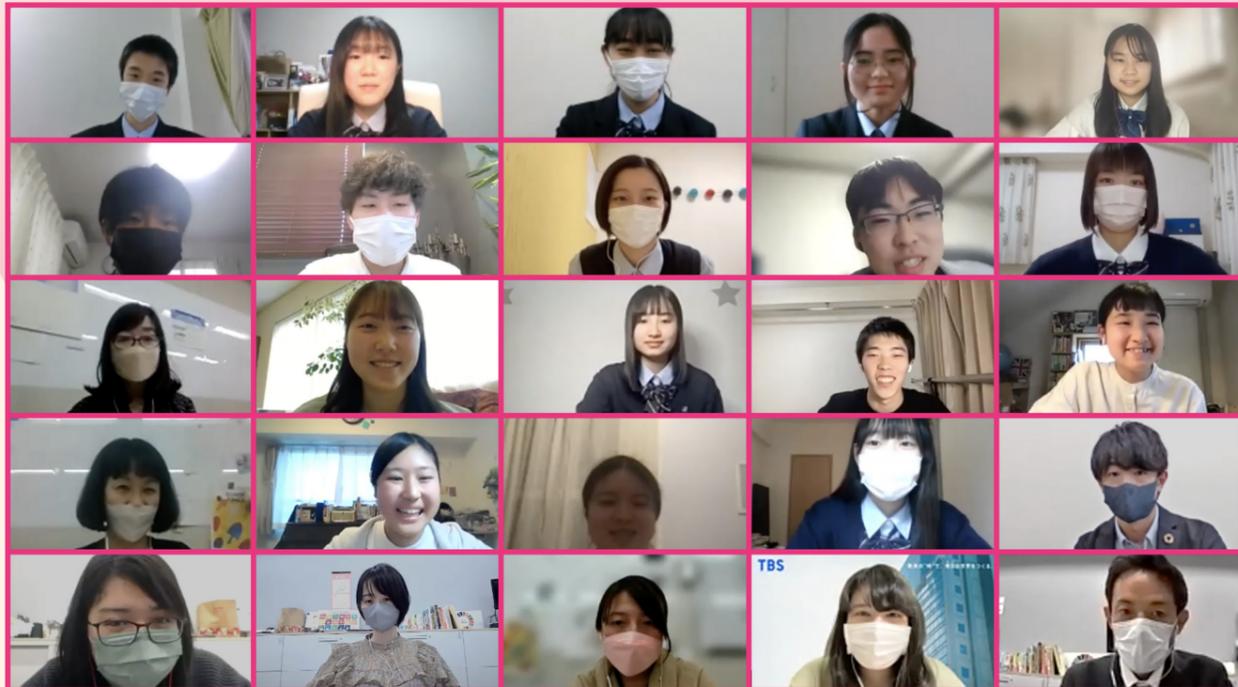
何かの大会やフェスなどで自分たちが行っている企画を出店したい
大久保こはる

SDGsの臭がなく、興味がない人も自然と興味を持つ若者×芸能人による番組
内野そら

専門家の方々と交えたディベートのようなものを開いて、身近にできることなど、SDGsについて詳しくない人たちも興味を持ってもらえる場を作りたい
前神夏音

若者を中心に、政治家も入れて未来について話し合いたい
土屋真希

東ティモールに行つてフェアトレードコーヒーの販売活動をする！
木本理来



「アシタノカレッジ」コラボ企画 キニマンス塚本ニキさんと ダイバーシティのフィールドワークへ！

ACTION 3



若者たちとのディスカッションから生まれたアクションプランの数々。フィールドワークのテーマとして、今回はダイバーシティについて学ぶことが決まりました。さらに、TBSラジオの人気番組「アシタノカレッジ」とのコラボが実現！パーソナリティを務めるキニマンス塚本ニキさんと共に、学生団体50cm.の上川そよ香さん、SDGs子ども勉強会プロジェクトの櫻井晃太郎さんと國吉こなつさん、高校2年生の安藤蒼空さんがフィールドワークに赴き、その様子が10月12日の番組内でオンエアされました。

ニキさんと若者たちが向かった先は、東京都港区にある「ダイアログ・ダイバーシティミュージアム『対話の森』」。この施設では、視覚障がい者が案内人となり、完全に光を遮断した“純度100%の暗闇”を体験することができます。白杖を頼りにコース内の道や橋を歩き、視覚以外の感覚を解放つ漆黒の90分。日常の当たり前が奪われ、視覚障がい者の日常を体験した皆さんは、何を感じ、何を考えたのか？アテンドを務めたハチさんも加わり、ダイバーシティをめぐる対話が始まります。

ニキさん「暗闇の中に入り切る前、ざわざわする空気を肌で感じて、一瞬だけ不安になりました。でも、ハチさんに従って自分の名前を言って、みんなと名前を呼び合って、すぐに安心できたことが印象的でした。ところで、ハチさんは目が見えなくなって、どういふふうに生きていこうかと悩んだことはありますか？」

ハチさん「高校1年生までは一般の学校に通っていましたが、高校2年生のときに視覚障がいを自覚し、特別支援学校に転校しました。こう言うと絶望的に思われるかもしれないですけど、それまで見えるフリをしてきたので、『あ、隠さなくていいんだ』って、逆に安心したことを覚えています」

ニキさん「目が見えていたころに好きだったことや遊びの楽しみ方はどんなふうになりましたか？」

ハチさん「そうですね。目が見えていたころは、見ることに楽しみを見出していました。例えば、花火を見に行ったときは夜空を見上げて、一生懸命、花火を探していました。でも、いまは心臓で花火の音を聞くことも好きですし、頭の中で花火を打ち上げることもできる。目が見えていたころより自由に

なりました」

ニキさん「その感覚、少しだけ体験しました。見えないものを頑張って見ることを手放すことで、(コース内の)虫の音や足元の感触を頼りに歩くようになりました。ほかのみんなはどうでしたか？」



安藤さん「暗闇に入ったら名前を言わないと自分の居場所がわからないし、他の人がどこにいるかもわからない。名前を言って自分の場所を示すことが大事だと思いました」

ニキさん「自分の名前をあんなに連呼することはなかなかないもんね(笑)」↓



コースの入り口となる部屋で
ハチさんからルールの説明があり、
いざ真つ暗闇の世界へ

上川さん「私は暗闇の中で何回もうなずいていたんですけど、『あ、暗闇だから見えてないんだ』って気がきました(笑)。あと、相手が見えるときよりも安心感やみんなとのつながりを感じました」

櫻井さん「暗闇の中だから相手を信頼するしかない状況もあつ

たと思います。それと、恐怖心から自然と歩幅が狭くなり、モノとの距離感がわからない感覚がありました」

ニキさん「(コース内の)縁側に座るときも、端っこに恐る恐るちょこんと座ったり。でも、手で触ってみたら意外とゆつたり座れるじゃんって(笑)」

ハチさん「それ、私たちの生活のあるあるです！自分の近くを触りながら、徐々にスペースを広げていくイメージですね」

國吉さん「(コース内で)橋を渡ったとき、前の人が橋の幅を教えてくれて、それがあつたから渡ることができました。近くに人がいて、助けてくれるっていいことだなと思いました」

ニキさん「私は途中で白杖を落としてしまって、みんなに探してもらいました。どうしよう、白杖がないと先へ進めないぞと。一人で知らない場所にいたら不安だったと思います。ハチさんは白杖を忘れて外出したことはありますか？」

ハチさん「家を出るときに忘れることはありますが、家の敷地からは怖くて出ることができませんでしたね」

安藤さん「家の中では白杖を使わないんですか？」

ハチさん「基本的には使わずに、玄関の傘立てにしまっています」

安藤さん「自宅の中は慣れてるから白杖がいらないのか、あるいは手すりなどの工夫がされているのでしょうか？」

ハチさん「特別支援学校などで、家の中では白杖を使わないと教わりました。どこに何があるかを覚えたり、手で確認しながらゆつくり歩いたりしています」

國吉さん「普段の生活で不便に感じることはありますか？」

ハチさん「意外と不便なのが、飲食店などのお店に入るとき。

お店の近くには行けるんですが、入り口がわからないことがよくあります。建物によっては脇に入り口があることもあって、そういうときは『正面から入れないのか、騙されたっ！』って思います(笑)」

櫻井さん「点字はどうやって覚えましたか？日常生活でエレベーターの点字を触っても、どれも同じに感じてしまいます」

ハチさん「高校生のころに頑張って覚えました。先生に教わりながら練習して、1文字ずつ認識する練習を繰り返すと、段々と文章を読めるようになっていきます」

ニキさん「指の感覚が研ぎ澄まされている？」

ハチさん「どちらかというと、感覚の使い方が変わったと思います。誰もが持っている感覚だけど、使い方がわかって初めて点字を読めるというか。一般の学校に通っているところは点字は遠い世界で、自分ごととして覚えないと身につかないと思いましたね」

ニキさん「みんなは縁側のある部屋の中を動き回れましたか？」



上川さん「あまり動けませんでした。部屋の中に畳があつて、私の家にも畳があるので自然と四つん這いになって、普段と同じことへの安心感がありました」

安藤さん「部屋の中にラジカセなどがあつて、『ラジカセあつたよ！TBSラジオ聞けるかな』って(笑)。何かを見つける喜びがあつて、そのたびにみんなで共有しました」

國吉さん「普段は目でモノを認識しているけど、触って判断することはとても新鮮でした」

ニキさん「みんなが何かをしている音を聞いて、音から想像して情報を取り入れる感覚はありましたね。目が見えると情報とめどなく入ってくる。だからといってすべてを脳にインプットしているわけではなく、目の前にあるのにスマホを探すことも多々あつて(笑)。自分の感覚を中途半端に使いながら生活していることも少なくないなと思いましたね」

上川さん「普段、目を使いすぎていることがわかつて、ほかの感覚が伸びた感じはします」

櫻井さん「日本の家具は低く作られていて、低いものは安全なんだと気がきました。(コース内の)電車に乗るとき、電車とホー

ムの間にある隙間を頭の中で想像して、怖がりながらもたいで。日常の中には意外と怖いものがあるんだなと思いました」

國吉さん「電車に乗ったとき、段差も、中の形もわかりませんでした。電車で目が見えない人がモノを落としたら大変だなと



思っていたけど、大変というよりも怖いなと…」

上川さん「普段のコミュニケーションで、『目の前にラジカセがあるね』とはあまり言いません。みんなわかっているから言わないことがたくさんある中で、それを言葉にすることで仲が深まることに気がきました。捨ててきた言葉や会話があるので、これからは言葉にする努力をしようと思いました」

ニキさん「私も『自分が見えているからあなたも見えて当然』という考えは変えたいと思いました。目が見えている人が同じものを見ているとは限らない。そして、私に見えているものが1つの事実や真実ではなくて、隣に座っている人には別の角度から見えているかもしれない。『私からはこう見えているけど、あなたにはどう見えますか？』と会話してみたら、『意外とそういう視点もあつたんですね』という発見がある。今日体験したこと、聞いた話はこの先ずっと忘れたくないなと思いました」

安藤さん「目が見えないことはマイナスに捉えられがちですが、今回の体験で鳥の声や線香花火の音、芝生、そういうものを聞いたり触ったりして、いろいろなことを想像しました。想像力という意味では選択肢が増えたり、視点が変わったりするので、マイナスではないなと。ブラインドサッカーのボールをパスし合つたときも、相手がちゃんと受け取ってくれるかを想像したり…」

ハチさん「いま、相手がどういう状態かを想像する」

ニキさん「言葉で確認をとって、それをするだけで相手の優しさを感じられて、自分も優しくなれる」

ハチさん「普段の生活でも、相手のことを想像することはすごく大事ですね」



「アシタノカレッジ」と
コラボしたオンエア回はこちら



地球を笑顔にするWEEK

特番でSDGsを深掘り!



事前特番「やってみようよSDGs 地球を笑顔にするTV」では、これまでの番組セットを再利用。「貧困をなくそう」をメインテーマに取り上げました。

TBS ラジオも特別企画!



世界を笑顔にするためにチャレンジする人たちにスポットライトを当て、「アシタノカレッジ」などの番組にさまざまな分野の挑戦者を招きました。

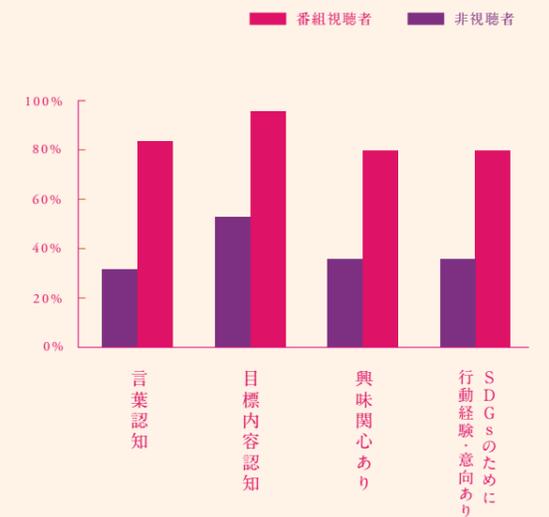
BS-TBS で特番を放送!



中村勘九郎、勘太郎親子に加え、次男・長三郎も参加し、親子3人共演のナレーションで、日本各地のSDGsの取り組みを紹介しました。

「地球を笑顔にするWEEK」は
アクションのきっかけになっています

視聴者・非視聴者の認知・興味関心・
行動経験/動向



WEEK がどのようにSDGsに貢献しているか、ビデオリサーチが行った調査データをもとに詳しく見てみましょう。

右のグラフのように、「言葉認知」「目標内容認知」「興味関心あり」「SDGsのために行動経験・意向あり」の4項目において、非視聴者の倍近い数の番組視聴者に意識変化・行動変容が生じていることがわかります。また、理解度においては、「よりよい地球を残すための目標であること」「目標達成には自分たち個人でも取り組めること」などがいずれも8~9割を超えました。さらに、SDGsについて「具体的に行動していることがある」「まだ行動は起こしていないが、具体的にやってみようと思うことがある」「具体的ではないが、何か行動を起こしたいと思う」と答えた視聴者は約86%にのぼり、WEEKがなんらかのアクションを促していることも喜ばしい結果になりました。

2022 秋も、地球を笑顔にするWEEK

第5弾となる「地球を笑顔にするWEEK 2022 秋」は、10月31日(月)~11月6日(日)の期間で開催。最新情報やタイムスケジュールはこちらをご覧ください。



地球を笑顔にする

WEEK

メディアとして、SDGsを発信し続ける。

TBS テレビ、BS-TBS、TBS ラジオが一丸となり、さまざまな番組内で7日間にわたってSDGsを発信する「地球を笑顔にするWEEK」(以下、WEEK)。2020年11月に始まったこのキャンペーンは、視聴者のSDGsに関する認知や興味・関心、さらには行動意向にも変化を及ぼすなど、回を追うごとに大きな反響を呼んでいます。2022年5月2~8日に実施した第4弾「2022 春」では、川島明さん、杏さん、井上咲楽さん、国山ハセナアナウンサーが新たな大使に就任。特番「やってみようよSDGs 地球を笑顔にするTV」では、「住み続けられるまちづくり」と「貧困をなくそう」をメインに取り上げ、「今日からできるアクション」を紹介しました。

さまざまな情報・報道番組で国内外のSDGsの取り組みを連日紹介する中で、「2022 春」はこれまでのWEEKの中でも特に印象深いものになりました。ロシアによるウクライナ侵攻が激化し、SDGsの根幹が揺るがされたためです。WEEK 期間中、ウクライナ侵攻をテーマにした企画が放送されるなど(⇒P29)、改めて平和について考えるきっかけを視聴者にもたらしました。

世界の平和が脅かされているいま、2030年の目標達成に向けて、メディアの力が問われています。そうした中で、TBSグループはメディアとしてできることを模索し続け、WEEKを通じてSDGsを知るきっかけを、世界について学ぶきっかけを、地球を笑顔にする行動を生み出し続けます。

ACTION 4



田崎真洋

TBSテレビ／コンテンツ制作局バラエティ制作1部

Profile

2009年入社。「はなまるマーケット」のアシスタントディレクターを経て、2017年の立ち上げ時より「世界くらべてみたら」のプロデューサーを担当。企画や取材同行、将来を見据えた番組の方針づくりなど、番組制作全般に携わっている。

Interview: 01 Masahiro Tazaki

たとえ偽善だといわれようが、SDGsを発信することはメディアの役割だと思う

番組スタート時から「世界くらべてみたら」のプロデューサーを務める田崎真洋さん。その仕事内容は「自由」だと言います。「自分で企画を決められるし、取材に同行することも、編集することもできる。何をやるかは自分次第。意志があれば何にだって挑戦できる環境です。自分は大学時代にキノコを研究していたので、理系分野に興味があります。去年はJAXAに企画を持ち込んで、宇宙飛行士の星出彰彦さんが、宇宙ステーションで世界各国の宇宙食を食べ比べてみるという企画を実現しました」

「世界くらべてみたら」のキャッチコピーは「みんな違って、だいたい一緒」。世界各国の文化や風習、価値観の違いを紹介し、優劣をつけずにそれを認め合い、楽しむというコンセプト自体、SDGsが目指す世界と親和性が高いと言えます。「『地球を笑顔にする WEEK 2022 春』では、ガーナのスラム街に捨てられた廃材を使ってアートを生み出す長坂真護さんに密着しました。彼が番組のために作ってくれた作品は『世界を笑顔にする広場』にも展示し、その横には

番組出演者の外国人と一緒に世界各国の遊びを体験できるコーナーを設けました。たくさん子どもたちが集まってくれて、外国人や異文化とじかに触れ合える場を作れたことは本当に良かったと思います」

最も関心があるSDGsのテーマを聞くと、田崎さんは迷いなく「教育」だと答えます。

「質の高い教育を子どもたちに提供することは、平和や貧困などとも密接に関わっています。子どもたちが笑顔になれる世界は、SDGsの目標達成の象徴ではないでしょうか」

一方で、SDGsを発信する際の試行錯誤は尽きません。「発信者である自分がSDGsを実践できているかという点、自信がありません。そもそも、テレビ局として大量の電力を消費しているのに『何がSDGsだ』という意見があることも理解しています。でも、そういう後ろめたさを捨てて、たとえ偽善だといわれようが、SDGsを発信していきたい。それは、全国に同時性をもって情報を届けられるメディアとしての役割だと思うんです」



加納沙也香

TBSテレビ／情報制作局 情報2部

Profile

2007年入社。報道局の政治記者を経て、2019年から、今日一番の最大関心事をニュースにする「情報番組『ひるおび』の曜日担当プロデューサーを務める。ニュースの選定から特集の企画、専門家のキャスティングまで、番組づくりを統括している。

Interview: 02 Sayaka Kano

命の尊さ、未来に希望を見出せるような番組を子どもたちに届けたい

「未来を担う子どもたちに支持される、そんなテレビ局でありたい」。

報道局を経て、現在は「ひるおび」のプロデューサーを務める加納沙也香さんが大切にしている想いです。徳島市の女性市長と小学生による、ジェンダー平等をテーマにした対話を企画するなど、「子どもたちが専門家に質問を投げかけ、それに対して専門家が答え、対話を通して一緒に考えていく。そんなアクティブラーニングを意識した場」を作り出してきました。

加納さんの想いが強く結実したのが、「地球を笑顔にする WEEK 2022 春」期間中、「ひるおび」で放送された出前授業です。テーマはロシアによるウクライナ侵攻。青稜中学校高等学校の生徒から自由に質問を募り、専門家との対話を30分にわたって放送しました。

「子どもたちは『この戦争はいつ終わるの?』『子どもたちの教育はどうなるの?』といった、まっすぐな質問を専門家にぶつけました。戦争はSDGsを破壊する最たるものです。み

んなと一緒に考える中で、専門家の方が残した『武器では戦争は止められない。結局は人の力』という言葉がいつも胸に残っています」

既存概念が脆くも崩れ去る時代だからこそ、「先入観を持たず、ステレオタイプを取り払うこと」を心がけていると言います。「例えば、番組のボードに医師のイラストを載せる際、男女両方を載せるようにしています。小さなことかもしれませんが、メディアで発信することには既存概念を助長する危険性がある。だからこそ、物事を多角的な視点で捉えることを大切にしています」

その意識は、SDGsについて発信する際も同じだと言います。「地上波でSDGsについて発信することは重要です。でも、上辺をなぞるだけにならないように気をつけています。物事を多角的に、深く掘り下げること。そして、多様な意見や価値観があることを伝え、視聴者に考えるきっかけを与えたい。答えを導き出すのではなく、考え続けることを大切にしていきたいですね」



ACTION 5

平和な世界を祈り、つくるために 世界を笑顔にする広場

SDGs キャンペーン第4弾に合わせて、2022年のゴールデンウィークの3日間、赤坂サカス広場を中心に「世界を笑顔にする広場」を開催しました。ロシアによるウクライナ侵攻が激化する中、誰ひとり取り残さない平和な世界への祈りを込めて行われたイベントです。

ステージ上を彩ったのは、赤坂小学校の6年生が廃棄予定の布素材をキャンバスに、思い思いに平和を表現した「ピースフラッグ（平和の旗）」です。会場では、紛争地に暮らす子どもたちのことを知るワークショップや、蓮見孝之アナウンサーが紙芝居の読み聞かせを行った「世界のこども兵士について学ぼう」（⇒P8）など、戦争や平和を正面から扱った企画を実施しました。

また、「世界くらべてみたら」に出演する外国人メンバーと一緒に世界の遊びを体験したり、「東大王」のメンバーと来場者がSDGsクイズで直接対決したり、TBSの人気番組とのコラボ企画も実現。会場には子どもたちの笑顔と笑い声があふれ、ワークショップなどに参加した人数は3日間で延べ1万3000人を超えました。

どんなに世界の平和が脅かされようとも、未来のために子どもたちの笑顔を育む大切さを実感した、意義深いイベントとなりました。



VOICE OF PARTNERSHIP

TBSとの連携により、セーブ・ザ・チルドレンだけでは実現できない規模の活動や発信が可能に

「世界を笑顔にする広場」にブースを出展し、会場を訪れた親子とセーブ・ザ・チルドレンのユースメンバーが「紛争下を生きる子どもたちに対し、私たちにできること」を一緒に考えました。対話を通し、参加者である小・中学生と高校生、大学生のユースメンバーから、紛争下の子どもたちのためにできることとして「募金をする」「友だちと話し合う」「投票に行く」など、さまざまな意見が出ました。世界で起こる紛争に対し、「自分たちにできることをしたい、でも、一体何ができるだろうか」と考える方々に、日本で起こせるアクションについて話し合い、行動につなげる機会を提供できたのではないかと考えます。

今回のTBSとのパートナーシップにより、「質の高い教育をみんなに」や「平和と公正をすべての人に」など、SDGsに関連する社会課題について、より多くの人々が理解を深め、考える機会を創出することができました。マスメディアや大規模なイベントと連携することで、セーブ・ザ・チルドレンだけでは実現できない規模の活動や発信が可能になります。そうした場の設定や発信の機会づくりをTBSなどのメディアが、各テーマに関する詳しい情報提供やワークショップの運営をセーブ・ザ・チルドレンなどのNGOが行うことで、意義ある連携が実現できると考えます。

公益社団法人
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
アドボカシー部
川口真実



2021年11月3日から7日の期間中、赤坂サカス広場の名前を“もったいない広場”に変え、地球環境について学び、考えるイベントを開催しました。

電気を作ることの難しさやありがたさを体験できる「人力発電！ミニSLを動かそう！」や、ビニール傘に絵を描いて世界にひとつだけの自分の傘を作ったり、海のプラスチックごみを使って万華鏡を作ったりするなど、身近な“もったいない”を起点に工夫を凝らしたワークショップが人気を博しました。

また、「Nスタ」に出演している気象予報士・國本未華さんが講師を務めた「お天気キャスター体験」の実施や、本来なら廃棄されてしまう規格外の野菜を買い取って販売する「チバベジ」の出店など、パートナーシップの輪を広げる取り組みにも力を入れました。

TBSはこれからも、さまざまなアプローチから環境問題への興味を促し、来場した子どもたちがアクションへのヒントを得られるイベントを続けていきます。

もったいない広場
環境にやさしい社会を目指して。



地球を笑顔にするHOUSE presents



ACTION 6

SDGsを一過性のもの終わらせないために

続けよう、SDGs。



気候変動対策

省エネや再エネ利用を促進し、
段階的にカーボンニュートラルを実現

TBSは再生可能エネルギーを扱う株式会社UPDATERとパートナーシップを結び、2018年にTBSラジオ戸田送信所、2019年に赤坂サカス文化施設（TBS赤坂ACTシアター、BLITZスタジオ、サカス広場）、2021年に緑山スタジオの電力の100%再エネ化を進めてきました。また、スタジオ照明のLED化などで電力使用量を約3割削減するなど、省エネの努力も続けています。2023年には、本社であるTBS放送センター・赤坂サカス文化施設・緑山スタジオのカーボンニュートラルを実現します。これによって、TBSテレビのレギュラー番組の7割近くにおいて、スタジオでの収録や生放送が“CO₂排出ゼロ”で行われることになります。



ACTION 7

TBSは、気候変動対策をはじめ、さまざまなSDGsに取り組んでいます。SDGsにおいて、継続的に取り組むことが解であると信じて。TBSの取り組みの一部をご覧ください。

ペーパーレス化

電子タブレットの導入で
紙の使用量を大幅に削減

ニュース番組「Nスタ」では、2022年5月から、原稿や番組の進行表などを紙印刷から電子タブレットへ切り替えました。放送1回分の紙の使用量を58%削減したほか、コピーや原稿の配布に走り回っていた若いスタッフの負担減にもつながりました。



ACTION 9

セットリユース

美術セットの3R
(リデュース・リユース・リサイクル)

ドラマなどで使われる美術セットにおいて、新たな廃棄物を生まないために、3Rに基づき大道具・小道具のリユースなどを行っています。例えば、ドラマで使用した手術室のセットをユニット化し、別のドラマでも引き続き使用しています。



ACTION 10



国連との連携

国連とメディアの気候キャンペーン
「1.5℃の約束」に参加

SDGsの達成にはメディアの力が不可欠だとして、2018年に発足した国連の「SDGメディアコンパクト」。TBSは2019年8月に加盟、翌年にはグテーレス国連事務総長の単独インタビューを実施しました。2021年には日本のテレビネットワークとして初めて、JNN系列全28社の加盟が完了しています。

2022年には、日本の加盟社有志150社近くが参加するキャンペーン「1.5℃の約束—いまずぐ動こう、気温上昇を止めるために」に参加。民放5局とNHKで特別動画や番組を制作するなど、テレビの力を結集し、世界の平均気温の上昇を産業革命以前に比べて1.5℃以内に抑えるためのアクションを呼びかけています。



ACTION 8

地球を笑顔にする MUSEUM

ダイバーシティに基づく
アート作品を展示

2020年から、赤坂サカス広場の仮囲いにアート作品を展示。2022年春には、「世界—大きな絵」プロジェクトで、世界中の子どもたちが平和を願って描いた絵を飾りました。子どもたちが描いた絵は、パリ五輪での展示を目指しています。



ACTION 11

みつばちプロジェクト

みつばちを起点に
自然環境について考える

TBS放送センターの低層階屋上では、10万匹のみつばちを飼育しています。みつばちが生息する地域には環境汚染がないとされ、赤坂近隣の小学生向けに体験学習を行うなど、みつばちを起点に自然環境について考える取り組みを推進しています。



ACTION 12

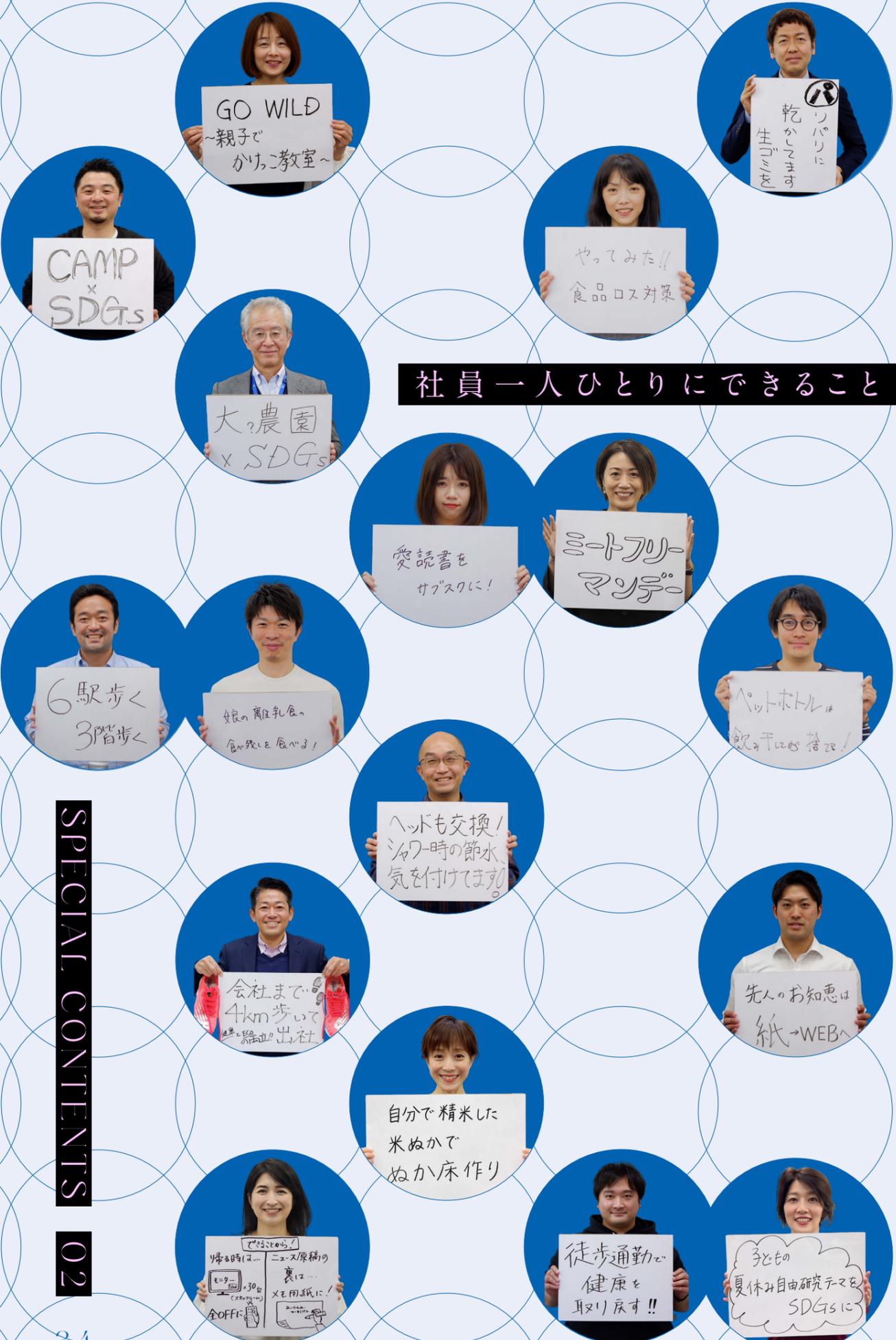
03 Chapter

サステナブルな働き方ってなんだろう？

全社一丸となってSDGsに取り組む企業として、持続可能な働き方について考え、対話し、行動を起こすことを怠ってはなりません。働きがいとは？ 働きやすさとは？ そのために必要な制度とは？ 悩み、考え、対話を重ねることで、真に働きやすい環境が生まれます。

SDGERS

社員一人ひとりにできること



TBSで働くということ。

意見を衝突させるのではなく、
対話を大事にする

皆川「今日集まった5人のメンバーは、こうして顔を合わせるのは初めてだと思います。まずは、どんな仕事をしているか、TBSに入りたいと思ったきっかけを教えてください」

苑田「私は2019年に中途入社しました。もともと、通信・テクノロジー関連の会社で働いていたので、ICT(情報通信技術)に関する知識を活かし、多くの人に(TBSがブランドプロミスで掲げている)『最高の“時”』を提供できればと思ったことが志望動機です。システム開発部は基本的に社内システムを作る部署なのですが、最近ではメタバースやブロックチェーンといった領域の新規ビジネスにも携わっています」

TBSテレビ / ICT局システム開発部
苑田翔吾



でした。そんなとき、大学側からTBSスパークルを紹介され、役員の方々ともお会いし、障がいに関係なく色々なことに挑戦できる雰囲気があるということで入社したいと思いました。いまは人事部で定年退職の対応や内定者のフォローなどを行っています」

皆川「どんな映像関連の仕事をしたかと思っていましたか？」

那須「中学2年生のときにチャールズ・チャップリンの『キッド』という映画を見て、音の情報はなくても、映像の力のすごさに感動しました。自分もいつかは、障がいの有無に関係なく、誰もが眼で観て楽しめるコンテンツを作りたいと思っています」

シリル「私が入社したのは2010年です。もともとはアナウンサーをやりたいと、最終面接で落ちたのですが、人事部の方に『一般職で受け直してみたら』と言われてTBSに入社しました。昔から映像や音楽が好きで、文字ではない表現ができる世界を探していたこともあり、最終的にはご縁があったTBSに決めた感じです」

皆川「私は2014年入社です。TBSのドラマが好きという気持ちでずっとあって、緑山塾というドラマ制作セミナーを受ける前に、TBSを知るためにアナウンサー試験を受けたら合格してしまっただけで、いまはニュースを読んだり、ナレーションを担当したり、色々な経験をさせてもらっています。ところで、那須さん以外は育休を取得されていますが、私自身はまだ制度を自分ごと化できていない部分があります。同時に、キャリアが止まってしまう不安もあるのですが、斎藤さんはどうでしたか？」

斎藤「7年前、1人目の子どものときは育休を3ヵ月しか取っていませんでした。やっぱり、キャリアが止まるのが怖かったで

すね。2人目のときは2年間しっかり取りました。ここ数年で会社の制度が整ってきたのと、周囲の方々がとても寛容で、状況も共有してくれるのでとても働きやすくなっていると実感しています」

苑田「私は2020年に3ヵ月間、育休を取りました。中途入社から1年半で取得した形ですが、周りから反対意見はありませんでした。制度があっても使えないと意味がありませんが、TBSは活用しやすい職場の雰囲気があると思います」

シリル「私は子どもが2人いて、それぞれ長めに育休を取らせてもらいました。最初は『復帰して仕事なくなったらどうしよう』という不安も少なからずありましたが、いざ戻ってみたら、それまで通りキャリアを築くことができています。自分以外にも長めの育休を取る男性社員が増えて、それが当たり前という空気が徐々に広がっていますね。TBSは柔軟性

TBSスパークル / 人事部
那須元紀



が高い会社で、自ら変わる力を持っているんだと、いまの環境を心強いと思うきっかけになっています。那須さんは人事部ですが、例えば、入社1年目の男性社員が長めの育休を取りたいと言ったらどう対応しますか？」

那須「難しい質問ですね(笑)。私自身、古い考え方に則った行動はしたくないと考えているので、1年目の男性社員でも育休を取っていいと思います。ただ、育休の取り方とありますが、在宅勤務と組み合わせるなど、ご本人の状態を見ながら、お互いにやりやすい方法を模索するのがいいのではないかと思います」

TBSテレビ / 報道局「Nスタ」ニュースデスク
ドウトレイシリル



シリル「1年目で育休を取ることをよしとしない古い価値観を持つ人がいたら、那須さんはどう説明しますか？」

那須「これもまた難しい質問です(笑)。古い価値観、新しい価値観、どちらの意見も間違っていないと思うので、それらを衝突させるのではなく、対話を大事にしたいですね」

自分や周囲の変化に
合わせて働き方を選ぶ

皆川「人を思いやることがすごく大事で、それが自分の働きやすさにもつながるんだなと思いました。そして、それはSDGsの多様性にもつながってくるものですね。各々の職場で多様性があると思いますが、『もっとこうなったらいいな』と感じる部分はありますか？」

シリル「私が知る限り、現状は時短勤務か、フルタイム勤務かの曜日別の組み合わせはできません。子どもがいる共働きの身からすると、週に2日だけ時短にしたい場合もある。月金でフルタイムが難しいために時短を選択すると、重要な仕事を任せてもらえず、やりがいに悪影響を及ぼすケースもあります。つまり、本当の意味でみんなが“働けるだけ働ける環境”が理想なのではないか。例えば、子どもが2人いて、保育園の送り迎えがあつて、妻は土曜日も仕事…というのが私の限界点。限界点となるのは環境もあれば、能力も、身体的なものもあって、それがその人の個性になる。その個性の中で働けるだけ働き、それを認め合うことが大切で、持続可能な働き方にもつながってくると思います」

TBSテレビ / アナウンス部
皆川玲奈



那須「私は耳が聴こえないということで、できる／できないを決めつけられることがあまり好きではありません。聴こえないからできないのではなく、聴こえない中で何ができるのか。(それが私の限界点なので) 分担し、調整しながら方法を探していきたいと思っています」

苑田「話を聞いていて、自分や周囲の変化に合わせて働き方



TBSグローウディア
イベントラジオ事業本部Eプロダクト事業部
斎藤絵里子

皆川「社会人経験を経て、なぜ、TBSを選ばれたんですか？」

苑田「TBSがデジタル分野も含めてビジネス展開していることを知って、自分の力を活かせればなと思いました」

皆川「なんか面接みたいになっちゃいましたね(笑)」

斎藤「私は入社の方が皆さんと少し違って、大学生のころ、TBSの公開放送のバラエティ番組でアルバイトをしていました。そこでやりがいを感じて、就職活動のタイミングで上司に声をかけてもらい、ドリマックス・テレビジョン(現在のTBSグローウディア)に入社しました。いまは赤坂サカスをはじめ、イベント運営に関わる仕事をしています」

皆川「続いて、那須さんお願いします」(※那須さんは聴覚に障がいがあるため、手話通訳者を介してお話しました)

那須「私は2020年に入社しました。就職活動では映像業界の仕事を探していたのですが、なかなか内定がもらえませ

を選ぶことがサステナブルなんだと思いました。例えば、出産やパートナーの転勤など、ライフスタイルが変わるときに、『この制度を使えばこの職場で活躍できる』という選択肢があること、その選択を受け入れる環境があることが大切だと感じました」

斎藤「コロナ前は週5日出社が原則でしたが、いまは週2〜3日を在宅勤務にし、多様で柔軟な働き方ができています。私自身、子どもとの時間を大切にしたい、仕事も頑張りたいという点で悩んだ時期もありました。でも、いまはワークスタイルが大きく変化し、自分の理想に近いゆとりを持った働き方ができています」

次の世代のために 制度を使うことの責任

皆川「この先、TBS でやってみたいことはありますか？」

苑田「私はデジタルビジネスに興味があるので、メタバースやブロックチェーンといった領域で挑戦を続けていきたいです」

斎藤「これまではイベントを請け負うことが多かったのですが、今後はTBS グロウディアとしてイベントの企画・制作・運営全体に携わり、多くの人に楽しんでもらいたいですね」

那須「マイノリティとマジョリティ、お互いが楽しめるコンテンツづくりに携わりたいです。例えば、マイノリティが俳優として普通に登場するドラマを作りたいですね」

シリル「仕事で実現したいことは別に、仕事以外の大切なことも実現できる環境を作り、育て、引き継いで、仕事から一時的に離れることが仕事のモチベーションにもつながるといふマインドチェンジに貢献したいと思います。それから、

男性の育休取得が当たり前になる過程を見ることができたので、制度を整えることはもちろん、次の世代のために“制度を使うことの責任”も大事だと感じています」

皆川「人生経験は声に出るので、いい歳の重ね方をして、アナウンサーという職人の道を究めたいですね。それから、TBS でしかできないことはたくさんあるので、TBS のために働くという視点を持てば、みんながもっと働きやすくなるかなと思っています。最後に、今日の会に参加してみたいかがありましたか？」

苑田「普段、障がいのある方と接する機会がないので新鮮でした。那須さんは我々と変わらないし、一緒にTBS を盛り上げていく仲間の1人として、お会いできて良かったと思います」

斎藤「那須さんは私以上に高い志を持っているので、お話を聞いて成長できたなと感じました」

シリル「那須さんは見た目ではわからないマイノリティで、(父親がフランス人で母親が日本人の)私は見た目では日本語が通じないと思われるマイノリティ。みんなが何かしらマイノリティの要素を持っていて、それが弱点になるときも、強みになるときもある。多様な人材を受け入れることは大変だけど、それと引き換えに新しい価値観を手に入れることができると思います。新たな発想が生まれるし、より社会の実態に近い意識を持ちやすくなるんじゃないかな」

那須「私の場合は耳が聴こえないマイノリティに属しますが、皆さんそれぞれが何かしら持っている。そうした中で、自分のアイデンティティを活かして仕事をしていきたいし、皆さんと一緒に新しい価値観を作っていきたいと思っています」

皆川「今日はありがとうございました。最後是那須さんに『ありがとう』を手話で教えてもらいましょう!」

制度があっても
使えないと意味がない

理想に近い多様で柔軟な
働き方ができている

アイデンティティを
活かした仕事がしたい

“働けるだけ”働ける
環境を作り、認め合う

人を思いやることが
多様性につながる



育休は自分と 向き合える有意義な時間

「生きた言葉を見つけてください」。

先輩アナウンサーの長峰由紀さんからもらった手紙に記された、国山ハセンさんがいまも大切にしている言葉です。「アナウンサーは原稿を読むことがメインなので、自分の意見を述べることは多くありません。そんな中で、この言葉は軽すぎないか、難しくないかといった表現について話し合い、ただ読むのではなく、想いをのせて生きた言葉を伝えるようにしています」

「news23」のキャスターを務める中で、“原稿を読むことの責任感”への考えも深まったと言います。

「現場取材に赴く機会が増え、ニュースでは報じられない側面を数多く目の当たりにしました。物事は決して単純ではないからこそ、自分の目で見えていないことを伝える際には可能な限り中立であろうと心がけています。一方、4月にはロシアによるウクライナ侵攻で母国を追われた子どもたちを取材し、子どもの未来について、平和について考えたことを自分の言葉で伝えることができました」

帰国後の5月からは、3週間の育休を取得しました。

「育児を学び、家族と過ごす時間が増えたことはもちろん、自分の人生やキャリアと向き合うことができた有意義な時間でした。妻の1日の生活サイクルを知れたことも、相手を思いやる気持ちにつながっています。男性の育休は社会的にも注目されていますが、ニュースにならないくらい当たり前になればいいですし、そのためにも積極的に取得していくことが必要だと思います。会社としても男性の育休取得に対してポジティブな雰囲気がありますし、できればもう一度取りたいくらいです(笑)」

2018年には念願だったサッカーW杯の取材を経験するなど、国山さんは「強く願い続ければ夢は叶う」と言います。「報道やエンタテインメント、スポーツなど、さまざまなことに関われる上に、配信やデジタルコンテンツの開拓を進めるなど、TBS はメディアとして変わろうとしています。強い思いがあればやりたいことが実現できる、そんな環境があると思います」

TBS テレビ／アナウンス部

国山ハセン

Profile

2013年入社。2017年から「Nスタ」のサブキャスター、2019年から「グッとラック!」の司会などを担当。2021年からは「news23」のキャスターに就任。ロシアによるウクライナ侵攻ではルーマニアやモルドバ共和国に赴くなど、現場取材を信条としている。



たくさんの賛同者と行動し、
社会に波を起こしていきたい



公益社団法人東京青年会議所港区委員会
委員長・若林真喜子

2022年6月、TBS 後援の下、「みなとダイバーシティフェスティバル」を開催しました。このイベントは、ダイバーシティを推進し、疎外感なく、誰もが幸福感をもって暮らせる社会の構築を目的としたものです。日本ではマイノリティと呼ばれる外国人、LGBTQ、女性リーダー、障がい者など、さまざまな特性を持った方々の考えに触れることができる講演やブース出展などを行い、延べ1万人以上の方にご来場いただきました。また、「世界くらべてみたら」に出展してもらい、その様子を番組で取り上げていただき、非常に大きな反響がありました。

来場者へのアンケートでは、8割以上がマイノリティに関する認識や価値観が変化し、ダイバーシティの理解が進んだと回答しました。「今まで偏見を持って見ていた“違い”を個性として自然と受け入れることができた」という声も多く寄せられており、理解促進のきっかけになったと感じています。

理解促進には、賛同者とのパートナーシップが重要です。たくさんの賛同者と行動することで社会に発信し、波を起こしていけると信じています。今回、TBS とパートナーシップを組めたことは大変ありがたかったです。今後もこうしたイベントを継続し、ダイバーシティ理解促進のきっかけづくりをしていきたいと考えています。そして、誰もが幸福に暮らせる社会を実現していきたいと思っています。

企業と手を組むことで子どもたちの
視野が広がり、新たな気づきがある



港区立赤坂小学校
校長・齋藤恵

パートナーシップのきっかけは、TBS が参加している赤坂未来妄想会議に出席させていただいたことです。TBS が持つエンタテインメント性と、赤坂の歴史や文化、自分たちが生業としている“食”を組み合わせることで、豊かでサステナブルな街づくりができるのではないかと感じました。会議で意見を交わし、“都心の村”を作ろうというひとつの答えにたどり着きました。

2020年6月には、TBS のバックアップの下、赤坂サカス広場で茜まつりを開催しました。TBS にSDGs 関連のブースも作っていただき、赤坂の街から飲食店などが出店し、街のシンボルである赤坂氷川神社の江戸山車も展示しました。昼間は子どもたちとその家族、夕暮れ時からは赤坂在住・在勤の方々が続々と集い、各世代が楽しめるイベントを成功させることができました。

TBS のSDGs に取り組む姿勢は素晴らしいと思います。それをさらに発展させるために、自分たち街の人間や地元企業、公共機関と組むことにより、できることが無限に広がると思います。パートナーシップによって、お互いの限界を突破できる、たくさんのことを共有できるチャンスだと感じました。

自然と人が集まり、外に出て、笑顔で人と触れ合える、循環型の素敵“都心の村”赤坂を生み出すために、まずはパートナーとしっかり意見を出し合い、距離を詰め、サステナブルな関係性を築いていきたいと思っています。

SDGs は、一人では成し遂げられません。

だからこそ、パートナーシップが必要不可欠です。

TBS とパートナーの輪は、未来に向けて広がり続けています。

本校では、「みなと子どもエコチャレンジ」として、SDGs に関する取り組みを推進しています。今回の「ピースフラッグ（平和の旗）をつくろう！」はカーテンの廃材を利用したもので、環境問題に関連した良い取り組みだと思い、実施する運びになりました。制作当日は、ウクライナで取材を行う TBS の舩場聖治記者から、現地の状況やウクライナの子どもたちの様子を聞かせていただき、いま起きている出来事に改めて関心を持つことができました。そして、平和を象徴する旗を各自でイメージし、思い思いのデザインの旗を作りました。子どもたちにとって、また、私たち大人にとっても、身近で起きている戦争について、平和について考えさせられるきっかけになりました。「世界を笑顔にする広場」では完成した旗を飾っていただき、多くの子どもたちが自分の旗を見つけて喜ぶ姿が見られました。

学校現場では、継続的にペットボトルキャップの回収運動や校内の緑化、紙のリサイクルなど、環境に関連したSDGs の取り組みを行っていますが、校内でできることには限りがあります。今回のように企業とコラボすることで、視野が広がり、新たな気づきがあります。そして、子どもたちがさまざまな経験をし、見識を広げることで、「自分たちがどのような社会を創っていかなければならないのか」を考えられる人になってほしいと願っています。

多様な立場や年齢の方々との対話が
重要であり、そのためには
パートナーシップが欠かせない



UNIVERSITY of CREATIVITY
プロデューサー・本橋彩

TBS と共にさまざまなプロジェクトを進める中で、「わたしたちの選択でミライを創造しよう～あなたに知ってほしい映画『ムクウエ』～」を開催しました。このイベントでは、コンゴ民主共和国で性暴力によって傷ついた女性たちを無償で治療しているムクウエ医師を取材し続けてきた、TBS 報道局員で『ムクウエ』の監督・立山芽以子さんを中心に、より良い未来を作るために何ができるかを考えました。

参加者の高校生が「国を越えて同世代でつながりながら、共に考え、行動に移していきたい。そして、自分たちの学びを子どもたちにも伝えていきたい。一緒に動かしましよう」と話していたのが印象的でした。答えはないけれど、世界で起きていることを知り、話し合い、考え、選択し、行動する。それを続けていくこと、世界で起きていることを多様な視点から見つめることの大切さを知りました。

多様な視点から世界を見つめるためには、多様な立場や年齢の方々との対話が必要であり、そのためには多様な方々とパートナーシップを組んでSDGs に取り組むことが重要です。特に、未来を担う高校生や大学生の視点やアクションに移す姿勢は、多くの気づきと刺激を与えてくれます。これからも立場や世代を超えてつながり、対話し、考え、アクションを起こし続ける場を提供していきたいと思っています。UoC は、TBS とそのような場づくり、アクションづくりを企画しています。ぜひご参加ください！

パートナーシップによって、
お互いの限界を突破できる



赤坂 まるしげ
店主 小久保茂紀

地球を笑顔にする ACTION

あ
と
が
き

いつかの日か、
“SDGs”という言葉が
必要なくなることを願って。

私は“意識高い系”という言葉が好きではありません。なぜなら、“系”がつくと、大抵その人を揶揄するニュアンスが込められているから。この国では、いつから意識を高く生きることで、人からイジられるようになったのでしょうか…。

先日、ドイツへサッカーの取材に行った後輩が、忙しい仕事の合間に現地のSDGsについて調査をして、「意識の高さに圧倒されました！」と報告してくれました。公園に誰でも利用できるガラス張りの「本のリサイクルボックス」があったり、車の代わりに大きな荷物を運ぶことができるカーゴ付きのシェアサイクルも。何より、ドイツの人々にとってSDGsは“やらされている感”ではなく、普通に生活に浸透していることに驚いたと話していました。きっとドイツには、“意識高い系”なんて言葉は存在しないんじゃないかと思います。

そんな話を聞くと、日本はまだまだSDGs後進国だと思われ知られますが、変化の兆しは確実に見えています。TBS社内でも意識の変化を感じます。頼んでもいないのに海外出張先で現地の状況を調べてきてくれるなんて、SDGsキャンペーンを始めた2年前では考えられないことです。

そして、この冊子にも登場してくれた「地球を笑顔にする ACTION」の若者たち！彼らが持つしなやかな感性や問題意識と、メディアの発信力や影響力がタッグを組めば、私たちが目標とする“社会を動かす起点”になれるのではないかと…。そんな期待を抱かずにはいられません。

そう遠くない将来、SDGsなんて言葉に頼らなくても、みんなが当たり前のように他人を敬い、環境を大切にしていって、“意識が高い”ことがカッコいい社会にきっとなる。そう信じて、私は堂々と“意識高い系”を全うしようと思っています。

TBS SDGs 企画部長
井上 波

『地球を笑顔にする SDGs ACTION BOOK』製作委員会

SDGs 企画部：
井上波 / 花岡薫 / 福田剛 / 古川愛 / 青木玲奈 / 高島瑞希 / 唐川美樹

総合プロモーションセンター：
吉田裕二 / 松原貴明 / 川鍋昌彦 / 中森卓也 / 内山真理子 / 吉原瑞那

#TBSと一緒にアクション

「TBSと一緒にSDGsに取り組みませんか？」

昨年の「地球を笑顔にするSDGs ACTION BOOK」で発した私たちの呼びかけに応えてくれた若者たちとのコミュニティができました。

その名も「地球を笑顔にする ACTION」。

少しずつ対話を重ねながら、

SDGsの目標を達成するためにいろいろな活動を始めています。

もっと仲間を増やして、SDGsの輪を広げていきたい。

私たちはそう思っています。

TBSと一緒にこんなことがやってみたい！

全国の仲間とつながって意見交換がしたい！

メディアを使ってSDGsを発信したい！

皆さんの自由な提案をお待ちしています。

一緒に考え、アクションを起こしていきましょう！

TBSへのアクション提案はこちらから！

ハッシュタグ「#TBSと一緒にアクション」を付けて投稿してください。



Twitter:
地球を笑顔にするつぶやき
【TBS × SDGs】

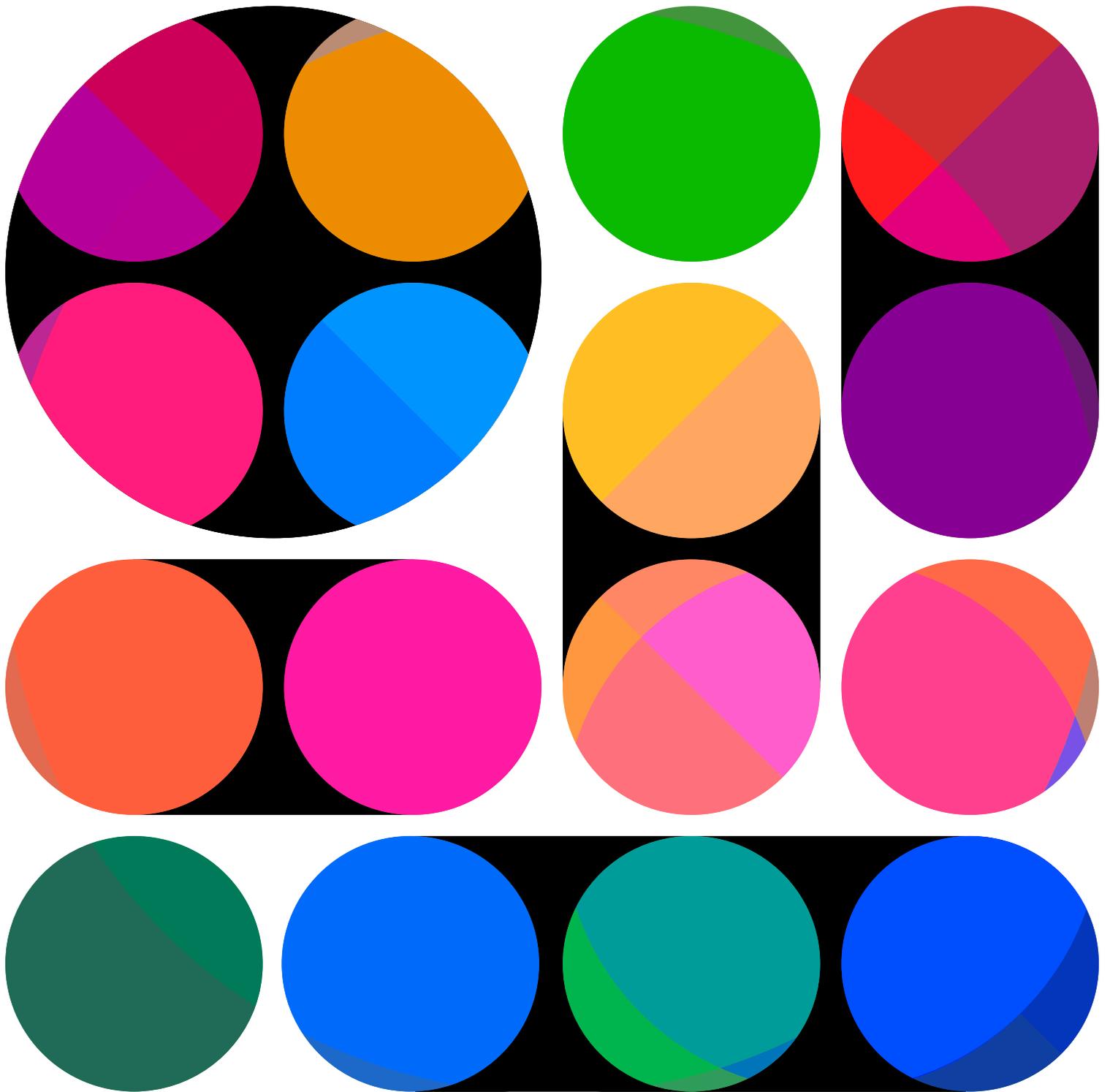


Instagram:
地球を笑顔にするWEEK
【公式】

TBSのサステナビリティサイトを リニューアルしました！

TBSが取り組むさまざまなサステナビリティ施策についてまとめています。皆さまのご提案も募集しています。
https://www.tbs.co.jp/TBS_sustainability/





TBS

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

TBSは持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。